

帝國新讀本卷六

3759
Ha7
資料室

教
41
200

41561

教科書文庫

4
810
41-1925
2000301563

TO
100

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

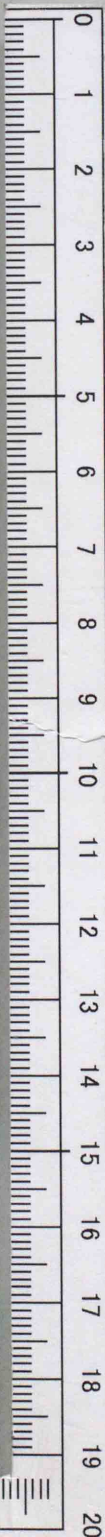
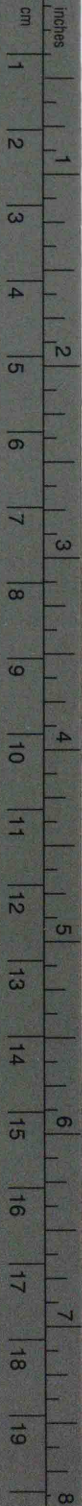


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1925
2000301563



冑 甲

資料室

375.9
Ha7

日六十月二年四十正大
濟定檢省部文

東京大学図書
帝國新讀本
合資會社 富山房發兌

文學博士芳賀矢一編



広島大学図書
2000301563



帝國新讀本 卷六

目次

一	日本人と自然美	一
二	流泉啄木	六
三	野邊の秋風	二一
四	伊藤公を誅ぶ	二四
五	テニスの試合	二七
六	狐塚	三三
	水車問答(自修文)	三六

七	感謝……………	三
八	碓氷だより……………	三五
九	旅ごゝろ……………	四〇
一〇	最後の参内……………	四四
	ハンニバル(自修文)……………	四六
一一	冬の山里……………	五四
一二	武藏野日記……………	五五
一三	三つの眺……………	六二
一四	雪前雪後……………	六九
	雪の野營(自修文)……………	七三
一五	鶴の國……………	七六

一六	人臣の道……………	八四
一七	我が國體と萬世一系の信條……………	八六
一八	早春の賦……………	九二
一九	樹の根……………	九九
	蟻蟲と蜘蛛(自修文)……………	一〇四
二〇	十訓抄より……………	一一一
二一	夢で出會つた運慶……………	一一六
二二	東大寺……………	一二一
二三	鎮西八郎……………	一二五
二四	白河殿夜討……………	一二三
	大宮人と武士(自修文)……………	一三六

二五 春の樂み……………一四二

二六 北海の春の詩……………一四四

二七 仁は心のいのち……………一五〇

二八 扇の的……………一五四

二九 平安京……………一五九

三〇 京に着いた夕(自修文)……………一六四

三〇 文學と氣品……………一七〇

目次終

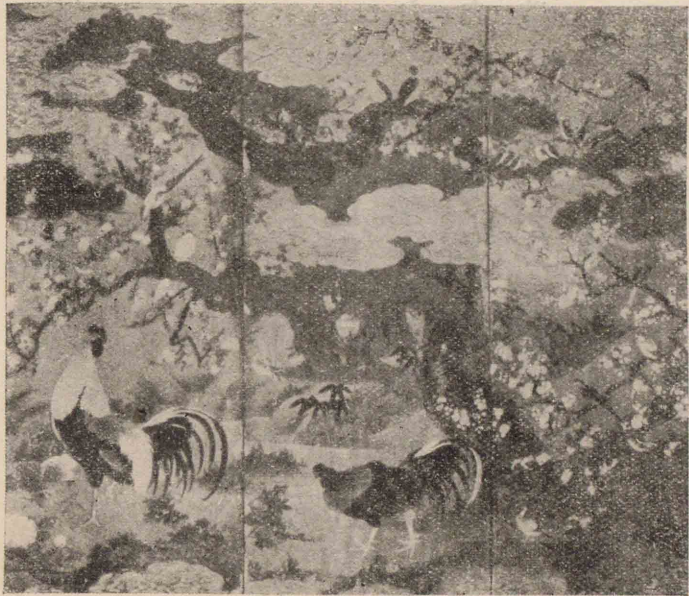


帝國新讀本 卷六

一 日本人と自然美

世界の各民族中、日本人ほど自然美を愛し、自然美を樂しむ者はない。家屋、庭園の造築から首めて、一切の器具、服飾、一つとして材を自然美に採らぬものはない。日本へ漫遊する外國人は、まづ街上に遊んでゐる女の子の美しい染模様の着物に驚き、次に博物館に入つては、刀劍、甲冑、古來軍人の用ひた一切の武器が、風流な花鳥を以て飾られてゐるのに感心する。仔細に觀察すれば、觀察するほど、自然美に對する嗜好が、いかなる微細な點にまでも行渡つてゐるのを歎賞する。紅葉形の煎餅、黄菊を象つた蒸菓子、これを盛る器はも

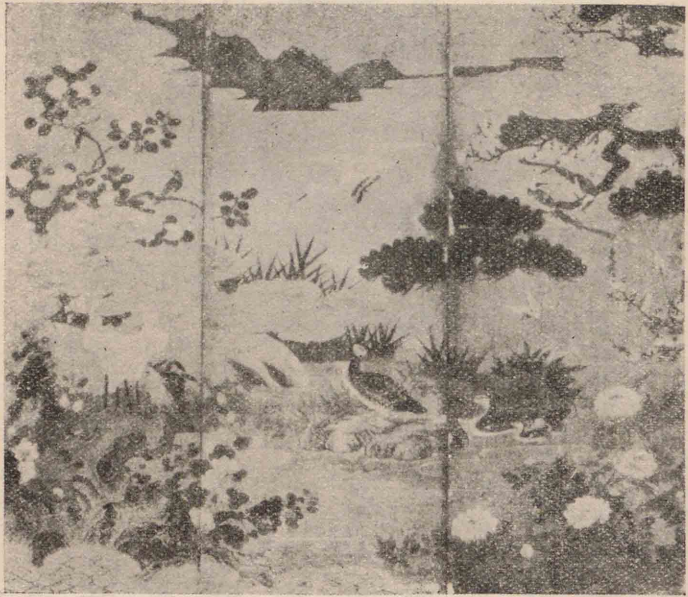
輪郭 背景



狩野永徳筆

こより、これを薦める部屋の欄間、襖、床の間の掛物、生花、何を見ても、外界美を縮圖したものでないのではない。日光の東照宮を見物しては、その建築彫刻の美に驚くよりも、その輪郭、その色彩が、いかにその美しい背景と調和を保つてゐるか、を驚歎するのである。日本人は自然の形を保存して、しかも一層これを美化して、自然物を愛賞する。生花の術に於ては、花卉自然の枝ぶり、幹ぶりを、自然よりも一層美化して示

静物



花鳥屏風

す。盆栽も同様である。箱庭盆栽の配置は自然の風光よりもその趣が更に多い。自然界の縮圖で、しかも自然美を構成してゐる急所、中心點を、巧に捕捉し得るのである。日本の繪畫が花鳥山水にすぐれてゐるのは、はいふまでもない。西洋畫題の静物など、日本の花鳥畫とは著しく違ふ。

日本の文學は自然美を歌ふところがその生命である。古代の和歌から近世の俳句まで、概ね自然美を歌つた歎賞の聲である。自然美

心理上

推移

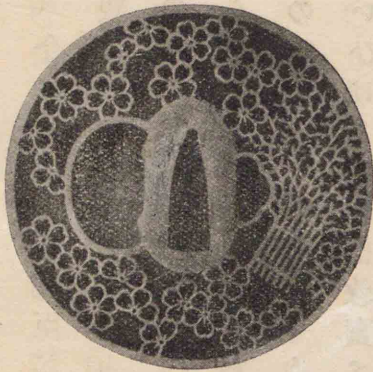
を愛するの極は、人事を以てすべて自然美と結合せしめてしまつた。喜怒哀樂すべて吾人の心理上の状態は、皆自然美をいひあらはす語句を譬喩的に用ひてゐるのである。百合花の榮ゆる。「いひ、夏草のまごふ。「いひ、思の煙。「いひ、花の心。「いひ、涙の露。「いひ、袖の時雨。「いひ、皆それである。單に春雨といひ、菜の花といひ、萩の花といひ、木枯といつても、日本人の心の中には、直ちにそれと聯想する幾多の人事が浮かぶのである。自然と人事は全く融和して、一つになつてゐるのである。吾人の日常往復する手紙の文にすら、まづ時候の挨拶やら、四季の推移などを冒頭に置くのである。

一年四季の推移がいかに日本人の享樂を助けたか、いかにその注意を惹いたかといふことは、春秋の争が、古來未決の一問題であるのを見てもわかる。霞がくれに百花のこりふに、咲匂ふ春が佳いか、秋霧を分けて淡き濃き紅葉の色を尋ねる秋が佳いかといふ

(一)源氏物語の女主人公
(二)秋好中宮
執着心

物のあはれ

ことが、千年以上の歌人の争となつてから、歴代の國文學はおもひおもひに、その論争に耽つてゐる。源氏物語にも春を愛づる紫の上(一)と、秋を好く(二)中宮とは、その代表的人物としてゑがかれてゐる。日本人は、自然美に執着心の深いものがあるまい。



鐔

昔の人は物のあはれを知るのを理想とした。これは人情の美を知ると同時に、自然美を味はふことを言つたものらしい。人情美を知るくらゐの人は、自然美を味はふことも出来るし、自然美を理解することの出来る人は、人情美にも缺けぬと考へたのである。古武士の理想とした武士道も、これとは離れないで、いはゆる大和心といふのは、單に武勇一遍を意味するのではない。鎧の袖から刀の鐔(三)に至るまで、風流の

數寄を凝らす

數寄を凝らした趣味も、この見地から理解が出来る。本居宣長の大和心の歌も、この意味を加へなければ、了解は出来ないと思ふ。

二 流泉啄木

(一)醍醐天皇の皇孫、天元三年(六四〇年)薨、年六十三。
いみじ
えならず
(二)山城と近江の國境
雑色

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。よろづの事に勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵(めくら)を作りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年ごろ琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

あながちに好む

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、彼の逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家とこやうなれば行かずして、人をもて内に蟬丸にいませけるやう(なご)思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし。盲これを聞きて、その答をばせずしてはいはく、

よの中はこてもかくても過してん

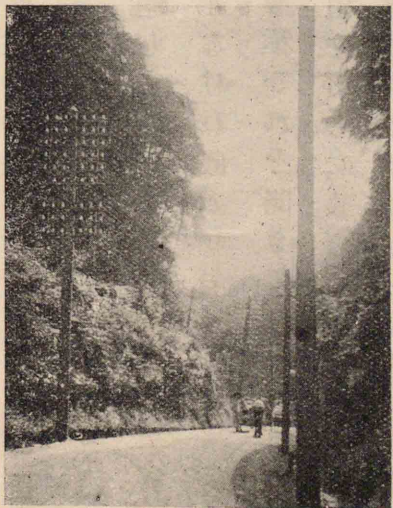
宮もわら屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、愈、そのみやびの心に感じ、思ふやう(わ)われ音楽の道を好むによりて、この盲にあはんと思ふ心深し。されどこの盲の命いつまであらんもはかり難し。わが命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。と思ひて、夜彼の逢坂の關に行きにけり。さ

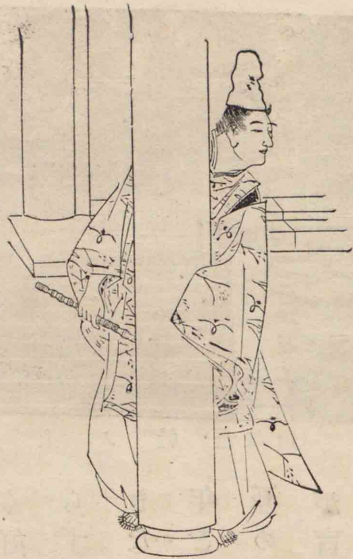
れども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や弾く、今や弾く、密に立聞きければ、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめ。』と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めてうれしく思ひて、聞くほごに、盲獨り心をやりて詠じていはく、

逢坂の關のあらしのはげしきに

しひてぞあたる世をすすごすこて



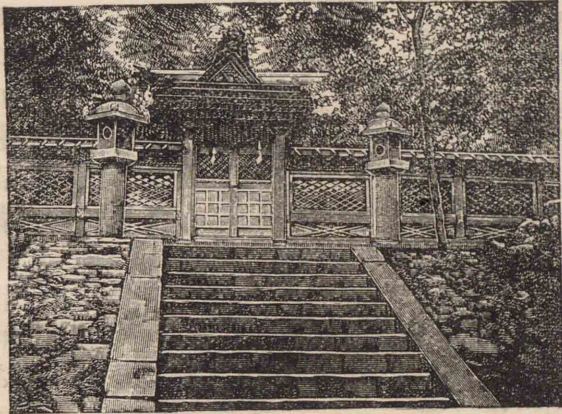
山 坂 逢



(實故賢前) 雅 博 源

こて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし。物語せん。』といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ。』といひければ、盲のいはく、かく申すは誰にかおはする。』博雅のいはく、我はしかく人のなり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。』盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語なごして、博雅流泉、啄木の手を聽かん。』といふ。盲故宮はかくなん彈き給ひし。』こて、件

かたみに



蟬丸上ノ社(逢坂山)

の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければたゞ口傳をもてこれを習ひて返すく喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道はたゞ此の如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしきものなり。雖も、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始

——今昔物語による——

(一) 歌人、延喜七年(一五六七)没。

千年まで契し松も今日よりかは君にむろつかれてよへ

(二) 江戸の國學者、靜庵と號す。の門人、賀茂真淵。六年(二四二五)歿、或は五十七、

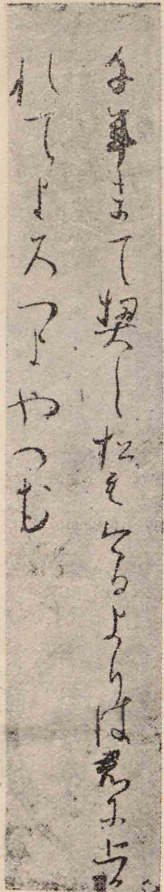
三 野邊の秋風

藤原敏行^(一)

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
かぜの音にぞおごろかれぬる

藤原俊成

夕されば野邊の秋風身にしみて
うづら鳴くなりふか草の里



藤原俊成筆蹟

もののふの草むすかばね年ふりて
あき風さむしきちかうが原

加藤宇萬伎^(二)

(一)歌人、堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕へた、金葉集の撰者

(二)歌人、建久二年攝政となつた、建永元年(八十六年)歿、年三十八

(三)俊成の子、新古今集の撰者、仁治二年(一一九〇年)歿、年八十

松

秋風のおとだに秋はさびしきに
ころもうつなり玉川のささ

(一) 藤原俊頼

(二) 藤原良經

人すまぬ不破の

關屋の板びさし

あれにし後は

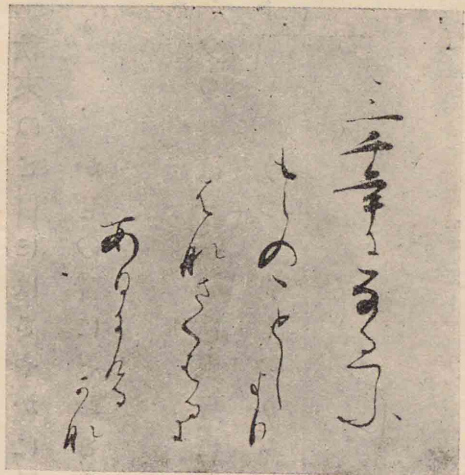
たゞ秋のかぜ

(三) 藤原定家

みわたせば花も

紅葉もなかりけり

藤原資宗



傳藤原定家筆蹟

浦のごまやのあきのゆふぐれ

いかだしよ待てこご

ごはん水上は

いかばかり吹く

山のあらしぞ

小澤蘆庵

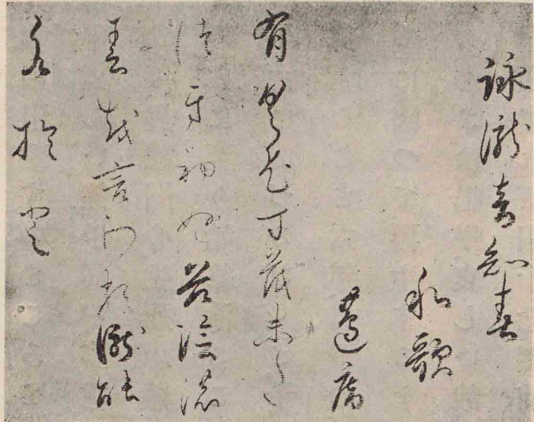
くりもるみ柿も

色づきうなるらが

ほこらしげなる

時は來にけり

賀茂眞淵



小澤蘆庵筆蹟

信濃なるすがの荒野をこぶ鷺の

つばさもたわに吹くあらしかな

詠瀧音知

春和歌

蘆庵

うくひすも
またなきそ
めぬ谷陰の
春を言わる
瀧の水おと

(一) 滿洲吉林省松花江の右岸

異體同心

金石も當ならず

(二) 文久三年發憤

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃するところとなり、暴かに清國吉林省哈爾賓驛に薨ず。嗚呼、哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も、予君と交る五十餘年、異體同心、生死患難をともにし、國歩艱難の秋に始り、太平富貴の日に至り、始終渝ること莫く、金石も當ならず、自ら謂ふ、交友の誼、今古に愧づるなし。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君子の垂死を哭すること二回。予幸に君の交情看護に因つて、再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼、哀しい哉。

回顧すれば四十七年前文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤、海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潜に泰西に航し、居ること僅かに半年

内証

(一) 高杉晋作、藩の志士の先輩

(二) 木戸孝允、明治の元勳、長州藩の藩士

(三) 大久保利通、明治十年、鹿兒島藩士

破竹の如し

組織の才



伊藤博文

餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に歸り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。内証尋いで起り、予は暗夜要撃に遭ひて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を恢復し、我が一大危難を轉過せり。すでにして王政復古、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、木戸、大久保二公を佐けて最も力あり、維新の績これよりして、破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、永く國家の本を固くし、その他法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勲業の盛を極め、首めに韓國統監となりて、保護の範を立つ。

淬礪
王臣匪躬

寧處

君、學漢洋を兼ね、識東西に通ず。最も東洋の平和を以て念とし、常に忠節、道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗を爲し、外人は視て平和の表を爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向かひ、北滿の野に見學す。忠君報國の厚きに非ずんば、誰か能く此の如くならん。豈意はんや、君の忠節にしてこの不測に遭ひ、暴かに異邦の地に



井上馨

薨ぜんとは、嗚呼、哀しい哉。

白叟黃童

君の訃電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟黃童、織婦耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才

環球着望の盛
振古

德、勳業を稱讚し、環球着望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。抑、予は又これに因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに努め、以て君の志を紹ぐべし。古人いふ、匪以報公、維以報國。死者復生。信我此言。と、庶はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しいかな。

老友 侯爵 井上馨

五 テニスの試合

尾崎喜八

(一) 大學の運動場で、

(二) テニスの試合をやつてゐる。

(三) コートのまはりは見物で一はい。

その長方形に密集した人垣の中で、

(一) 慶應義塾大學
本詩は、大正十
二年十月行は
れた同大學と
東京高等師範
學校との試合
を歌つたもの

(二) Tennis

(三) Court

Time.

球が縦横にほん／＼飛ぶ。
 四人の選手が綾にみだれて、
 堅く平かなコートの上を、
 飛んで来る球にしたがつて前進し後退し、
 右に駆け、左に走り、
 白いラインの内側の世界に、
 はげしい熱氣の火花を飛ばす。
 夕暮に近い空氣のさわやかさ。
 太陽はうしろの森の頂に見える尖塔の上に、
 めづらしく朗かな一日の
 親みある、又莊嚴な顔をして、
 そのあたりの空間に金を播きちらしてゐる。

むかふの東の空の淡桃色の雲、
 又その下のはるかなはなだ色、
 見わたすかぎり天も地も、
 ひろ／＼した秋の静けさ美しさに、
 水のやうに満たされてゐる。

試合は刻々に熱して来る。
 両軍の選手の表情には、
 次第に決然としたものが加つて来る。
 見物の注意は、
 飛びちがふ球の方向と、
 それに應ずる選手の稻妻のやうな動作の上に
 熱を帯びて集中する。

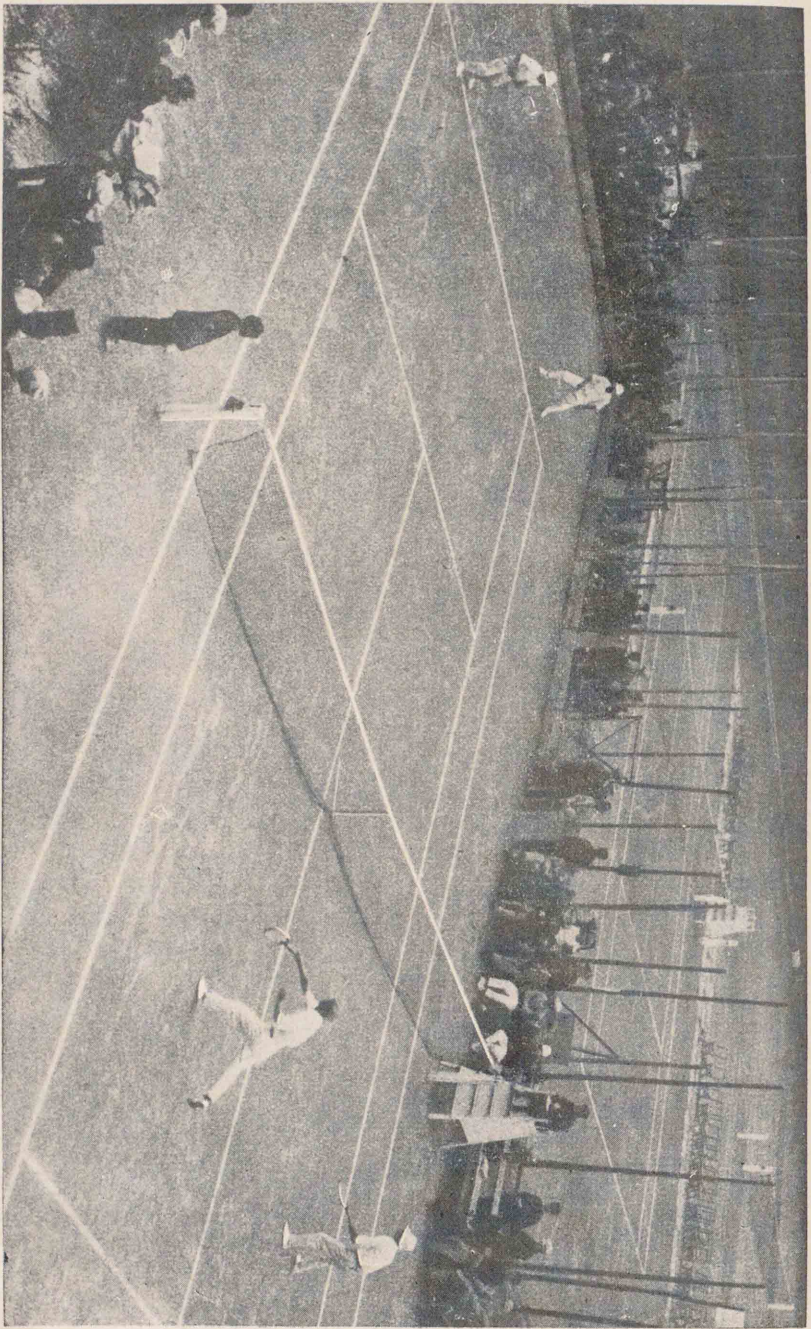
Serve

まなざし

颯爽

白熱

サーブの手堅い打ちこみ、
 両脚を開いてあらゆる難球を受止めようこ
 身がまへる
 前衛の決意と確信とのまなざし。
 打てば直ちに突進し、
 又はすばやく後退する飛鳥のやうなその運動。
 球の性質を咄嗟に見て取るその俊敏な頭脳と眼と、
 腰をひねつて横に拂ひ、
 飛びあがつて叩きこみ、
 又片足を引き、両脚を山形にふんばつて、
 飛來する球をすくひ打ちするその颯爽たる姿勢。
 實にそのあらゆる瞬間が白熱であり、
 尖鋭に尖鋭した注意が、



合試のスニテ

修練の妙味と相俟つて、
看る者を驚歎せしめる技倆をあらはす。

しかも當の選手は、

眼中たゞ一個の輝く球があるのみだ。

むしろ球の速度、それに與へられた廻轉の方向、

そのバウ^(←)ンドの方向の意識があるのみだ。

彼等自身球となり、ラケットとなり、

又ラインとなり、ちよつこの間隙もない。

その緊張し切つた體軀と神經の共同動作の美しさ。

彼等四人の打ちこみ打ちかへす氣魄の猛烈さ。

そして輕快な球、獯猛な球。

笑つてゐるやうな球、怒つたやうに見える球。

又ばら／＼に碎けて飛散るかと思はれるラケットの激烈な

Bound.
Racket.

氣魄
獯猛

(Violin)
(Saccato)

打撃。

又ヴァイオリンの頓首(ニ)スツカイトのやうなその微妙な一あて。

一切の技術と頭腦と運動とがそこに現出するものは、

悉く一個の白熱した力である。

この氣魄を讚美する。

この白熱を讚美する。

これは單に遊戯でありながら、

ここに捲きおこされたものはもはや遊戯ではない。

眞劍そのものである。

あゝ眞劍を讚美する。

男子の眞劍を讚美する。

勝負の如何ではない。

問題は眞劍であることだ。

人間のあらゆる生活に於て、

藝術のあらゆる製作に於て、

この眞劍さの現れる時、

それは人を動かす力の美となり一つの勇となつて、

肉迫せずには濟まないと思ふ。

六 狐 塚

主このあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は殊の外よう出來て御座る。さりながらこの頃は鹿、猿、貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼出し、山田の番にやらうと存ずる。やい／＼太郎冠者あるか。太はあ。御前に居ります。主汝を呼出すこと別の事でない。當年は身ごもの山田が殊の外よう出來た。それにつき、この頃は鹿、猿が田を荒すほごに、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば

氣の毒

追うて番をせい。太畏まつて御座る。私一人で御座るか。圭いや、後程は次郎も見まひにやらうほごに、まづ行け。太心得ました。圭さりながらこの中は、狐塚の狐が出てばかすこいふほごに、ばかされぬやうにして番をせい。太それはこはい事で御座る。もはや参ります。圭「明日早々歸れ。太はあ。さても」迷惑な事をいひつけられた。夜晝使はるゝこいふことは、氣の毒な事ぢや。参るほごにこれぢや。まづこれにゐて番をいたさう。

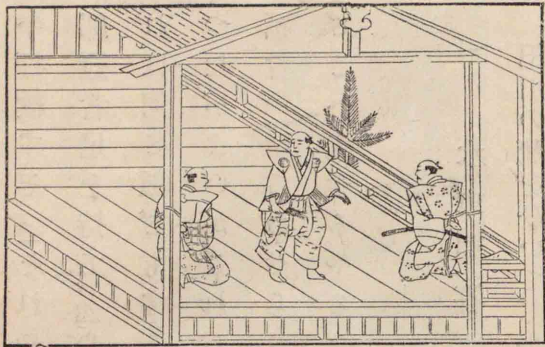
太儀

圭太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めて淋しうして居るで御座らう。次郎冠者を見まひに遣はさうと存ずる。やいゝ、次郎冠者あるか。次これに居ります。圭汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。次畏まつて御座る。圭小筒も少し持つて行け。次心得ました。これはさて迷惑なれども、参らざるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うて、ごこやら知れる事でない。呼ばは

つて見よう。ほういゝ。太郎冠者やい。ごこにゐるぞ。太さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるゝ事ではないぞ。まづ眉毛をぬらさう。次ほういゝ。太ほういゝ。ごこにゐるは。次ごこにゐるぞ。太ごこにゐるは。やあ次郎冠者か。次なかなか頼うだ人に言付けられて、伽に來たは。太ようこそおりやつたれ。さてもゝようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身ごもが追うたれば、こなたの山へくわらゝと逃げたは。次それはでかした。太ごつこへ。やる事ではないぞ。次これは何とするぞ。太何とすることは狐め。ばかさるゝ事ではないぞ。次おれは次郎冠者ぢや。太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿よい體のおのれ今に皮を剥いでくれうぞ。」

圭太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もこなう御座

る。見に參らうと存ずる。ほうい〜。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほういほうい。太これはいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。ほうい〜。主ほうい〜。ごにゐるぞ。太ここにゐます。主やあここにゐるか。淋しからうと思つて見まひに來た。次郎冠者を先へおこしたが。太なか〜。あれにゐます。これはいかな事。これもようばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。主これは何とするぞ。身ごもぢや。太おのれもようばけた。まづ縛つて、この大木にくくりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがる。いふふすべてやらう。さあ〜尾を出せ。鳴け〜。主おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして。尉當りめ。太何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあ〜鳴け〜。こんこんといへ。



狐塚 (狂言記所載)

匹ながら鎌を取つて來て、皮を剥いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思つたなあ。鎌を取つて來るぞ。主さても〜氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。次さやうで御座る。此方は頼うだ御方か。主なか。汝も縛りをつたか。次いかにも縛られました。主何と鎌を取つて來る。殺さうと言ひをつたが、何とそちが繩はほごかれぬか。次されば、ごうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ。解けますぞ。さあ解きました。ごれごれ、此方も解きませう。さても〜憎い奴で御座る。何とされたもので御座らう。主「いやいや、この體ではそばへ寄るまいほごにもこのやうにしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげろ。次一段とよう御

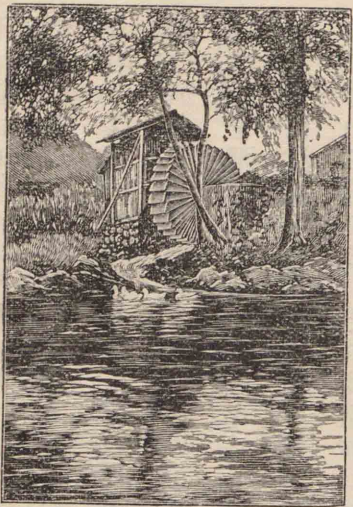
座らう。主さあこれへよつてもこのやうにしてゐよ。次心得ました。太狐めは二匹ながら居るか知らぬ。この鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ。主それや次郎冠者。次心得ました。主おのれ憎い奴の。次郎冠者足を持って。次心得ました。主さあゆりにあげ。ゆりにあげ。太これは何と狐ごもするぞ。次狐ごはまだおのれめは憎い奴の。縛り居つたがよいか。これがよいか。これがよいか。太さては頼うだ人。次郎冠者か。ゆるさせられ。まつびら御ゆるされ。まつびら御ゆるされ。次「ごこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」

水車問答 「自修文」

徳 富 蘆 花

田川の流をひいて、小さな水車が廻つてゐる。水車のほりに檜の木が一本立つてゐる。眞晝にも夢見る村の一人の遊び人が、或日檜の木の下の草地に腰を下して、水車のきい／＼と廻るのを見つゝ、聞きつゝ、例の睡ることもなく醒め

ることもなく、こんな問答を聞いた。「きい。」と一聲長くひつ張るかと思へば、水車が檜の木に呼びかけたのであつた。



「おい檜君、々々。君は年が年中そこにつくねんと立つてゐるが、全體何をするんだい。この忙しい世の中にさ。ほんたうに氣が知れないぜ。吾が輩を見給へ。吾が輩は君、君も見てゐるやうが、それは忙しいんだぜ。吾が輩は君、地球と同じに日夜動いてゐるんだぜ。い

木
それ、一時間に二百四十回轉、一晝夜に五千七百六十回轉、一年には驚くなかれ二百十萬二千四百回轉をやるんだ。なんと眼が廻るだらう。君は吾が輩がたゞ道樂に回轉してゐると思ふか。冗談ぢやない、全く骨が折れるぜ。吾が輩は決して無意味の活動をするんぢやない。吾が輩は人間の爲に穀も搗く、粉も挽く。吾が輩が昨年中に搗いた粳米がざつ

と五百何十石、糯米が百何十石、大麥が二千何百石、小麥が何百石、その外、粟、稗、黍、まだ大分あるが、まあざつと一年の仕事がこんなものだ。どうだね、自賛ぢやないが、働もこのくらゐやれば、まづ一人前はたつぷりだね。それにお隣にすまして御出での君はごうだ。いかに無能が性分だからつて、君の不活動にも驚くぢやないか。朝から晩までさ、年が年中そこにぬうと立ち、ほかんと立つてゐて、さうして一體君は何をするんだい。吾が輩は決して自ら誇るのではないが、君の爲にこの顔を赧くせざるを得ないね。おい、ごうだ。慳君言分があるなら聽かうぢやないか。いひ終つて、口角沫を飛ばすやうに、水車は水沫を飛ばして、響も高々と一廻り廻つた。

そこに沈黙の五六秒は續いた。かさく、かさく、頭上に細い葉ずれの音がするかと思ふと、それは慳が口を開いたのであつた。

「さうつけいはいはれると、おれは穴へでも入りたいやうな氣がするが、まあ聽いてくれ。それは、ここにかうして毎日君の活動を見てゐると、羨ましくもなるし、黙つて立つてゐるおれは、實以て濟まぬと耻づかしくもなるが、これ

機縁
佛道と佛語で、
佛道の悟を開
くべき因縁で
あるが、ここ
では單に因縁
の意に用ひた
る。

(一) 東京市四谷區
新宿から甲州
へ通ずる道路

が性分だ。造り主の仕置だから仕方がない。それに君は、おれがたゞ遊んで晝寢して暮すやうにいつたが、おれにもまんざら仕事がないでもない。聽いてくれ。おれの頭の上には青空がある。おれの頭は日々夜々にこの青空の方へ伸びて行く。おれの足の下には大地がある。おれの爪先は日々夜々に地心へ向かつて行く。おれの周圍には空氣と空間がある。おれはこの周圍に向かつて日々夜々擴つて行く。おれの仕事はこれだ。これがおれの仕事だ。成長が仕事なのだ。おれの葉蔭で、夏の日に水車小屋の人たちが涼んだり晝寢をしたり、おれの根が君を動かす水の流の岸をば崩れぬやうに固めたり、おれの團栗を子供が嬉々として拾つたり、そんな事は偶然の機縁で、仕事といふおれの仕事ではない。おれは今一人だが、おれの友だちもそこそこにある。その一人は數年前に伐られて、今は荷車になつて、甲州街道を東京の下肥を載せて歩いてゐる。他の友だちは下駄の齒になつて、泥濘の路や石ころ路を歩いてゐる。他の一人は鉋の臺になつて、大工の手脂に光つてゐる。他の友だちは薪になつて、さうに灰になつた。ごぶ板になつたのもある。又木目がばかに綺麗だといつて、茶室の床

(Tyre) 車輪のまはりにはめる環。

柱などになつたのもある。根こぎにされて都の邸の目隠にされたのもある。お百姓衆の鍬や鎌の柄になつたり、空氣(二)タイヤの人力車の楯(かざ)になつたり、様々な目に遭つて、様々な事をしてゐる。失禮ながら君の心棒も、おれの先代が身のなる果だご君は知らないのか。おれは自分の運命を知らぬ。いづれどうになるであらう。たゞその時が来るまでは、おれは黙つて成長するばかりだ。君はせつかく目ざましく活動し給へ。おれは黙つて成長する。」

いひ終つてちよつと唾を吐いたと思ふと、それは團栗が一つ鼻先に落ちたのであつた。夢見男は吾に復つた。そしてたゞいつもの通り廻る水車と、小春日に影も動かず眠つたやうな櫛の木を見た。

—みゝすのたはこと—

七 感 謝

吉田 絃 二郎

私は今地の上に立つてゐる。

若草は紅葉して秋の陽を浴びてゐる。素足の指に觸れた地は眞

冬の寂しい眠を想はせるほど、冷たく静かである。

私は小暗い木蔭の下に立つ。

四十雀の聲、かけすの聲、翡翠(かほせみ)の聲、すべて秋の聲は餘りに静かである。秋の雲のやうに。

私は小鳥の聲を聴く。

どこからあの美しい、あの静かな獨語の聲が生まれて來るのか。聲といつてしまふのには餘りに美しい、餘りに清淨な聲である。唄である。

私は芝草の上に立つて空を眺める。

何と云ふ偉大な、そして閑寂な雲の影であらう。

眠りかゝつた午後の空を、絹のやうに白い三條の雲が水平にためらうてゐる。

櫛の上の空には無数の綿をちぎつて捨てたやうな雲の群があ

Scene.

る。見てゐる間に形が變つて行く。色合が變つて行く。何といふ偉大な、何といふ無限な自然であらう。私はたゞ驚に打たれるばかりである。私は生きて空を眺めてゐることをほんたうにうれしいと思ふ。有難いと思ふ。草紅葉した原の上に、小さな丘がある。そこには紅と白と淡桃色の山茶花が咲いてゐる。黄ばみが、つた銀杏の樹、紅葉した櫻、下葉の焦げたひば、檜の木、杉などが山茶花の背景を作つてゐる。更に水のやうな秋の天空が遠景を作つてゐる。そしてこのやうな^(一)サインをば、渾然と或一つの豊かな色が、一つの調子が包んでゐる。いや、無限な色である、無限な調子である、掘盡しても掘盡すことのできぬ。私は枯草の上に坐つて、この豊かな自然を眺めてゐる。私が百年生きてゐたとしても、無限に生きてゐたとしても、この自然の美しさは、神秘さは感じ盡せないであらう。私の魂はこの自

然の美と神秘に咽せびさうだ。

私はこの世界に生きてゐることを感謝せずにはゐられない。私の足の下に白い野の花がある。見よ、私の頭の上の梢に、最後の葉が落日の光に顛へてゐるではないか。

たゞそれだけのものの中にも、生きて行くことの尊さ、有難さを思はせるものが十分ある。

地の上に霧が下りて來た。

かけすの聲、翡翠の聲、何といふ音樂的な聲であらう。

私は靜かにその聲を聴きつゝある、私自身の生活を祝福せずにはゐられない。
——草光る——

(一)長野縣北佐久郡、新井澤の宿驛をいふ。
黄葉疎枝
(二)群馬縣碓氷郡境上、北佐久郡三井、高三、一

八 碓氷だより

徳 富 蘆 花

舊輕井澤より黄葉疎枝の山路二十六町ばかり上れば、則ち碓氷^(一)

風霜に飽く

望を凝らす

(一)上野國北甘樂郡榛名赤城と併せて上州の三山といふ。

(二)上野、下野の二國。

白銀の帯

の頂上に候。熊野神社あり。神社を護して十五六軒。神社は街道より幾十級の石段を上りて東南に面し、神殿、拜殿、神樂殿幾年の風霜に飽き、神鈴語らず、鳥歌はず、寂々たる社内の風物いとゞ神さびてゆかしく候。試に石段の上に傘を杖ついて望を凝らし候へば、廣漠の景は双眼の中に歸し候。右手には輕井澤の谷一圓、黃落せる木の枝の間より隱見し、前面には妙義の頭を見越して、甲斐秩父の連山と面々相對し、轉じて左手の方は榛名赤城の諸峰東北に流れて、手を伸べて背を撫すべきが如く、足下には碓氷一郷の稻田黃河流る、が如く、丘陵に従ひ迂曲して、高崎に到つて茫々たる平野の海に打出し、眼を放てば海よりも廣き二毛武總の野、杳々天末に連り、黃なるものは田、黒きものは村、粉壁の白く輝ける、川流の白銀の帯を曳ける、心は望むに随つて潤く、坐に人生悠々の感を催すもの、これあり、千載の前曾てこの嶺上に頭を回らして吾妻の空を眺め、亡き姫

(一)碓氷郡。

を懐かしみ給ひし小碓の尊の昔も、今更に忍ばれ候。

絶頂より十町ばかりも下り候へば、道の三叉をなせる所に、霧積温泉道、從是一里…町と記せし路標の、たゞ一本淋し氣に薄の中にたゞずみ居り申候。概して絶頂より半道あまりの間は薄と松の世界にて、紅葉は殆どこれなく候。この薄の山を過ぎ候折節、淺間の方俄にかき曇り、麓は日影明らかになさしながら、山は一點二點の時雨はら／＼と帽に落ち申候。

しぐる、や薄分けゆく山三里

など打吟じて急ぎ候ほごに、満山の時雨薄に落ちて、恰も人の物言ふやうに御座候。空山聲なく、たゞ時雨の枯薄に落つる音と、時に木枯の一陣樹間にわたりて、落葉さら／＼と鳴るのみにこれあり、身はこれ王維畫中の人ならずば、韋蘇州詩中の人にや候はん。一心水の如く澄んで、何となく氣森然と改りたるやうに覺え候は、孟郊の

(一)唐の詩人。名は賈誼。又書畫を善くした。唐の詩人。名は應物。唐の詩人。名は中唐の詩人。字は東野。南山。塞。三。天地。日月。石。上。生。高。峰。夜。未。明。深。谷。晝。亦。平。路。險。心。亦。平。

いはゆる「山中入正」なるものにも候べきか。路は落葉多き所に入つて、時雨益々音高く相成候。

傘を傾け道を急ぎつゝ、獨り空想に耽りて歩み候ほごに、ふこ心づけば、時雨はいつか過ぎて、身はずでに紅葉世界に落居り申候。

遊蹤
尾、梅尾、楳尾、とも
都郊外の紅葉
の勝地
一驚を喫す

遊蹤狭き小生の事にて、紅葉といへば、たかが京都三尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何がなし、吾が立つ岨きを中心として、碓氷の東面悉く錦に候。左方の山谷を見れば、たゞこれ一面の錦、右の山谷を見れば、亦これたゞ一面の錦。滿山の錦、滿山の焰、五色の焰、峰といはず、谷ともいはず、たゞ燃えに燃立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず嗚呼と叫び申候。その黄色、淡黄色、褐色、黄褐色、その他思ふべくして言ふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありこあらゆる色美しき錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黄紅の楓一樹、此方の谷の底に、鮮血の如き淺紅の枝一枝、彼處の松の隣に、夕

焼の色よりも濃き深紅の兩三本、宛ら一山を照らす炬火の如く、萬段の錦の色を一時に呼覺し來るを見たる時には、小生はたゞ詩才のなきを恨み候。況や淺間時雨は、全山に水洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照らし、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を、惜氣もなく山に谷に漲らし下し候をや。

この峰に山人の棲みわぶる家一つ二つこれあり、小生その家の前を過ぎ候時は、主人は何か野稻の收納のやうなる事いたし居り候。「紅葉が好いね。」といへば、「は、紅葉かね。」と申候。彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、恐らくたゞ一度の歎美の辭を與ふることなく、白氏の風流を知らで、紅葉を焚きて茶を沸かし、朝夕の山の上下りにも、あたり錦を踏みにじり、かくて年々紅葉を迎へ、紅葉を送るにぞあらんずらん。

横川(一)より一里と申す所に、力餅を賣る茶店これあり。同所に到れ

(一)唐の詩人白樂天、その有名な詩の句「林間松酒焚紅葉」

(二)碓氷郡・碓氷峠の東麓

ば、碓氷の右側を通る舊道、中央を通る汽車道、左側を通る新道、皆一所に落合ひ碓氷三里、紅葉の観はこの所に終り候。 — 青蘆集 —

九 旅ごゝろ

島崎藤村

響りんく、音りんく、
打振り打振る鈴高く、
馬は蹄を踏みしめて、
故郷の山を出づる時、
そのかぐろなる鬘は、
涼しき風のふき亂り、
その紫の双の眼は、
青雲とほく望むかな。
えだの緑に袖觸れつ、

あやしき鞍に跨がりて、

馬上に謠ふ一ふしは、

げにや遊子の旅の情。

あゝ幼くて國を出で、

ひがしの磯べ西の濱

さても繫がぬ舟のごと、

ゆめ長きこと二十年。

偶、今年かへり來て、

昔懐へばふるさとや、

陰を岡邊に尋ねれば、

松柏すでに折れくだけ、

徑を川邊に求むれば、

野草は深く荒れにけり。

菊は心をおごろかし、

蘭は思をいたましむ。

高きに登り草を藉き、

惆悵として眺むれば、

檜原に迷ふ雲落ちて、

涙流れてかぎりなし。

去ねくかゝるふるさは、

再びいふに足らずかし。

あゝよしさらばけふよりは、

日行き風吹き彩雲の

あやにたなびく彼方をも、

白波たかく八百潮の

湧立ち騒ぐ彼方をも、

かしこの岡もこの山も、

いづれ心の宿させば、

繁れる谷の野葡萄に、

秋の實のりはとるがまゝ。

深き林のみぢ葉に、

秋の光は履むがまゝ。

響りんく音りんく、

打振り打振る鈴高く、

馬はかうべをめぐらして、

雲にいななき勇む時、
かへりみすればふるさこの

檜原は目にも見えにけるかな。

— 藤村詩集 —

一〇 最後の参内

さても今年^(一)両度の合戦に、京勢^(二)むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍^(三)左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢などを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられる。

京勢雲霞の如く淀^(五)、八幡に着きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に参じ、四條中

(一) 正平二年八月

(二) の河内國藤井

(三) 寺合戦、同じ攝

(四) 津國住吉阿部

(五) 野の合戦

(六) 足利勢

(七) 足利尊氏

(八) 同直義

(九) 山城國久世郡

(一〇) 藤原氏、吉野

(一一) 朝の忠臣、男

(一二) 山で戦死した

(一三) 後醍醐天皇

納言隆資を以て申しけるは、父正成、脆弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝^(一)の宸襟を安め参らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け参らせよと申し置きて死にて候。然るに正行、正時すでに壯年に及び候ひぬ。この度われと手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、この度師直、師泰に驅けあひ、身命をつくし合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に

(一)後村上天皇

取られ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候。ご申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

(一)主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向かふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とするところなれば、今度の合戦手を下すべきに非ず。ご雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。ご仰せ出されければ、正行頭を地につけて、ごかくの勅答に及ばず、たゞこ

れを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四

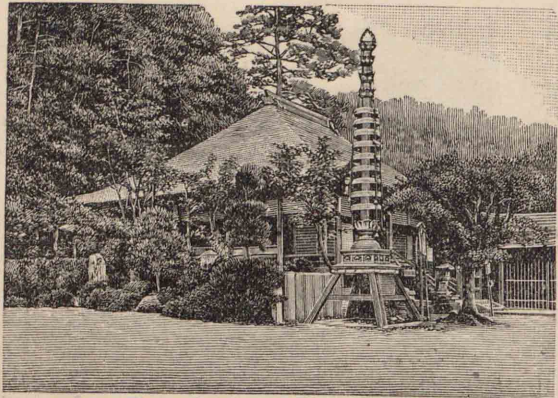
郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一
 如 足も引かず、一所にて討死せんと約束し
 意 たりける兵百四十三人、先皇の御廟に參
 輪 つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき
 堂 暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を
 過去帳に書列ねて、その奥に、

かへらじごかねて思へば梓弓

なき數にいる名をぞごごむる

ご一首の歌を書留め、逆修の爲ご思しく
 て、各鬚髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へご
 ぞ向かひける。

逆修



(山野吉在) 堂

(1) Hannibal

古代北アフリカの都市カルタゴの英傑

(西暦紀元前二四七年—一八三年)

(2) 名は文雄、政論家

千古傷心の事

千年の後までも心をいたましめること

(3) ハミルカル

(Hamilcar)

畢生生涯

終焉死ぬこと

人生室家の樂

家庭生活のたのしみ

尋常人

問

用兵の略

兵を用ひるはかりごと

文弱人

文事にのみ長じてよわい人

非議

非難すること

傷心

心をいたましめること

對峙

はり合ふ

(1) Carthago

乃父

自分の父

ハンニバル (自修文)

矢野龍溪

英雄の成敗には千古傷心の事少からずと雖も、東西古今を通じて、ハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歳の彼が、その父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、その終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥りて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて、諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復この人の如きを見ざるなり。若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れどもその用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず。人格上一點の非議すべきところなく、而してその末路此の如し。これ特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てて南北に對峙するものはローマ、カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならず。ロー人は戰鬪を事とする尙武の民なり。カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ



ハンニバル

人をして口兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向かはしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは、すでにその國が一つたび痛撃を受けたる後なるをや。本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て強敵に當らんことを。事固よりすでに非なり。

彼豈これを知らざらんや。知つて而してここに出づる、亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。

彼が志を決してスペインを發するに臨み、その兵幾と十萬と號す。然れども、ヒレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過終へし時、その兵すでに四分の一

見兵
現在の手勢。

(1) Gaul.

鳥合
よりあつまりり。

將帥
大將。

に滅ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。その途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令していはく、「去らんと欲する者は去れ。従ふことを樂しむ者は來れ。」と。この時に當りて將軍を棄てんとする者數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而してその兵はスペイン及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるもののみ。決してかの愛國心燃ゆるが如きロ兵の比にあらざるなり。蕪雜鳥合のこの兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、いづくんぞよく此の如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、その兵士は多く統一せる國民にして、愛國心ある者にあらざるはなし。たゞそれハンニバルに至つては即ち然らず。その將士はその將軍に對して、單に恩威を感じるのみ、實に愛國の要素を缺けり。この異様の兵を以て、かの將來印度以西を統一すべき運命を擔へる勇武絶倫、愛國無双のローマ人に敵對し、一たびは幾どこれを壓服せんとしたるなり。嗚呼、この人の外、千古復この人あらんや。

獨り人品のみならず、その戰鬪に長ずること亦古今無双なり。アレキサンダ

(2) Proterius II.

フロンシヤ王
(西曆一七一六年)

懸絶

かけはなれてあること。

奇戰

敵の不意に出

て行ふ戰

正戰

正面より正々

堂々と行ふ戰

(3) Cannae.

古代イタリア

アフリヤ州の

首府。紀元前

二一六年ハン

ニバル四萬の

兵を以て八萬

餘のローマ軍

をこの地に破

つた。

款を送る

よしみを通ず

る。内應する。

獻策

はかりごとを

すゝめること。

一、フレデリック、ナポレオンと雖も、その上に出づるを得ず。これ余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯すでに懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るになほ奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネの大戦を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしにあらずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。此の如き全勝は、歴史上實に稀有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國にもたらし歸りてこれを國會に示せる時、その國人の驚喜は幾何なりしぞ。この大勝に乗じて直ちにローマを衝かざりしは後人の憾むところなりと雖も、その兵やも甚だ多からず、加ふるに戦後の疲憊を以てす。この危道を行かずとも、一方にはイタリア南部の城邑は皆遙かに款を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。この戦の夕、一部將が、「我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、すでにその得失を知る、

金穀 軍用金と兵糧

操縱 あやつること

小康 少しの間の平

和

釐革 とのへあら

酒養 ためること

國帑 やしなふこと

國庫

急を緩め

こまるのをす

講策す

かんがへて方

法をたてる

武弁 武士

治平 國を治め天下

を平かにする

必ずしも後人の非議を待たざるなり。

彼の國人は必要大切なる場合にも、曾て十分なる援兵を彼に送りし事なく、十分なる金穀を彼に與へし事なし。これ彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、終にその成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして、彼の罪にあらず。此の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りてその缺を補へるのみならず、その金穀も毎にこれを敵國に取れり。その忍耐の大なる、亦その智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戦へり。彼は巧に外交を操縦せり。然れどもその本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚してこれに當らしむ。嗚呼、亦遅し。彼の智勇もこれを如何にもする能はず。しかもなほこの存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

(1) Hasturbal (一西曆紀元前二〇七年) 衰邦 おとろへた國 即ちカルタゴ 久瀾の喜云々 久しぶりてあつた喜をのべる

(2) 唐の詩人杜甫の句

(3) 陝西省鳳翔縣の地名、諸葛亮の本營のあつた所

(4) 諸葛亮、字は孔明、蜀漢の忠臣

縣文

いれずみ

(5) 今の浙江省杭州府

(6) 岳飛、宋の忠臣

眩耀す

まぶしくくらませる

その未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戦するや、兵寡く、食竭く。恢復の望は、單に懸りてその實弟ハスドルバルがスペインより援兵を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリーの北野に破られ、彼が手を握りて久瀾の喜を叙せんと樂しみたるその人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙かに彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘の事多しと雖も、未だこの人のこの時の如きはあらざるなり。

彼が遙かに弟の首級を望みける時、「我今カルタゴの運命を知れり。」と歎せし一言は、いかに無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず。况や自國の興亡はこの援軍の勝敗に懸りしをや。史を讀んでここに至り、卷を捲うて長歎せざる者果して幾人かある。「出師未捷身先死」の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の鯨文を露して餘杭の市に斬られし岳武穆も、亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するが爲に、人或はその名將たるを知つてその人格を察せず。若し能くこれを究めば、その不幸を悲しむ情うたゝ深きを加へん。

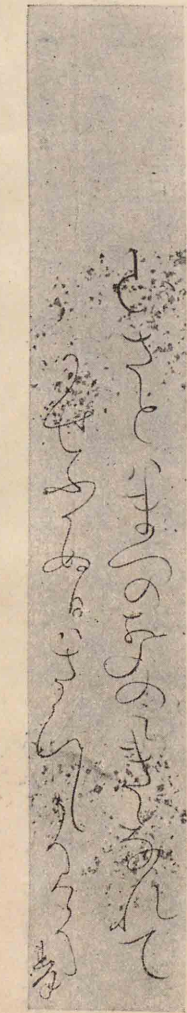
千古傷心の事、實にこの人の一生の如きはあらざるなり。 — 出鱈目の記 —

一一 冬の山里

太田垣蓮月^(一)

^(一)女流歌人。京都に住んだ。明治八年歿、年八十三。

冬畑の大根の莖にしもさえて
あさこでさむし岡ざきの里



蹟筆月蓮垣田太

柿本人麿^(二)

^(二)歌人。持統、文天、武、阿朝に仕へた。

近江の海ゆふ波千鳥なが鳴けば

こゝろもしぬにいにしへ思ほゆ

讀人しらず

神無月ふりみふらずみ定めなき

しぐれぞ冬のはじめなりける

和泉式部^(一)

^(一)平安時代の歌人。越前守大江雅致の女。

さびしさに煙をだにも絶えじこて

柴をりくぶる冬のやま里



蹟筆樹景川香

香川景樹^(二)

^(二)江戸時代京都の歌人。天保十四年(二)五十七年歿、年七十六。

照る月の影の散りくるこゝちして
よる行く袖にたまる雪かな

一二 武藏野日記

國木田獨步

九月七日——「きのふもけふも南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間を洩るゝ時、林影一時に煌く——」

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑のそのままでありながら、空模様がそれと全く變つて來て、雨雲の南風につれて、武藏野の空低く頻りに雨を送る。その霽間には日の光が水氣を帯びて、彼方の林に落ち、此方の杜に輝く。自分は屢思つた、こんな日に武藏野を大觀するここが出来たら、いかに美しいことだらうかと。二日置いて九日の日記にも、風強く、秋聲野に滿つ。浮雲變幻たりとある。ちやうどこの頃はこんな天氣が續き、大空と野の景色が間斷なく變化して、日の光は夏らしく、雲の色、風の音は秋らしく、極めて趣味深く自分は感じた。

變幻

まづこれを今の武藏野の秋の發端として、自分は冬の終る頃までの日記を左に並べて、變化の大略と、光景の要素を示して置かうと思ふ。

九月十九日——「朝空曇り風死す。冷霧寒露、蟲聲しげし。天地の心なほ目ざめぬが如し。」

同二十一日——「秋天拭ふが如し。木葉火の如く赫く。」

十月十九日——「月明らかに、林影黒し。」

同二十五日——「朝は霧深く、午後は霽る。夜に入りて雲の絶間の月、牙ゆ。朝まだき霧の霽れぬ間に家を出で、野を歩み、林を訪ふ。」

同二十六日——「午後林を訪ふ。林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睥視し、默想す。」

十一月四日——「天高く、氣澄む。夕暮に獨り風吹く野に立てば、天外の富士近く、國境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一點、暮色漸

睥視す

く到り、林影漸く遠し。」

同十八日——「月を踏んで散歩す。青煙地をはひ、月光林に碎く。」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。滿目黄葉の中、緑樹を雜

ふ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み、默思口吟し、足に任せて

近郊をめぐる。」

同二十一日——「夜更けぬ。戶外は林を渡る風聲もの凄し。滴聲頻り

なれども、雨はすでに止みたりと思し。」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉殆ど搖落せり。稻田も殆ど刈

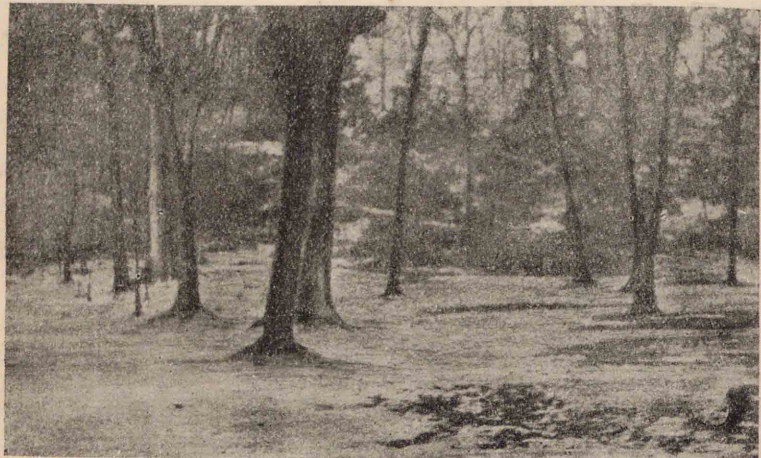
取らる。冬枯の淋しきさまとなりぬ。」

同二十四日——「木枯未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消入らん

ばかり懐かし。」

同二十六日——「夜十時記す。屋外は風雨の聲もの凄し。滴聲相應ず。

けふは終日霧立ちこめて、野や、林や永久の夢に入りたらん如し。



武 藏 野

午後犬を伴なうて散歩す。林に入

り黙坐す。犬眠る。水、林より出でて

林に入る。落葉を浮かべて流る。折

折時雨しめやかに林を過ぎて、落

葉の上を漲りゆく音靜かなり。」

同二十七日——「昨夜の風雨は今朝

なごりなく霽れ、日麗に昇りぬ。屋

後の丘に立つて望めば、富士山眞

白に連山の上に聳ゆ。風清く氣澄

めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面に水溢れ、林影倒に映れり。」

十二月二日——「今朝霜雪の如く、朝

日にきらめきて見事なり。暫くして薄雲かゝり、日光寒し。」

同二十二日——「雪始めて降る。」

一月十三日——「夜更けぬ。風死し、林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝりて、戸外を窺ふ。降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ、武藏野沈黙す。しかも耳を澄ませば、遠き彼方の林を渡る風の音す。果して風聲か。」

同十四日——「今朝大雪。葡萄棚墜ちぬ。」

夜更けぬ。梢を渡る風の音遠く聞ゆ。あゝ、これ武藏野の木より木を渡る冬の夜寒の木枯なるかな。雪ごけの滴聲軒をめぐる。」

同二十日——「美しき朝空には片雲なく、地は霜柱シロツチ白銀シロガネの如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。」

二月八日——「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三月十三日——「夜十二時、月傾き、風急に、雲涌き、林鳴る。」

同二十一日——「夜十一時、屋外の風聲を聞く、忽ち遠く、忽ち近し。春

や襲ひし、冬や遁れし。」

——獨歩全集——

一三 三つの眺

煌々

群陰皆影を伏す
有象無象

詩的情緒

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破せられるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない。清涼の光である。皎潔無垢、崇美と稱すべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰

(一)賀茂真淵の門
人村田蒼生子
の歌

子の蔭、寒地の氷の家眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の、千草の露の玉ごこに宿るやうなものである。(一)うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶは千々の思なりけり。である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向かつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。(二)この冷たい光が、古往今來、どれほどの暖みを人間に與へたか、又現に與へつゝあるか、月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富、貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにする。ことは、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。(三)花ならば、咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降る

古往今來

乾坤を一つに
す

(二)新讀古今集、
僧仙覺の歌

(一)唐の詩人白樂
天の句

瓊玉を敷く

對照の妙
變化の奇

み吉野の山、(一)といふやうに、眼に入る物悉くその下に包まれてしまふ。(二)千世界銀成色、十二樓臺玉作層、(三)の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目のさめるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものである。一年中、蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまざま、これを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのもうれしい。人世に花なくんば、これほど寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花

(一)「年ふれば
は老いぬし
はあれど、
をし見れば
思もなし」
藤原良房

(二)新古今集、藤原資王の母の歌

(三)古今集、清原深養父の歌

(四)謡曲「葛城」の句

やか、花々しい、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ花^(一)をし見れば物思もなし。といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。月雪花三つの眺には、各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

(二) やま櫻花の下風吹きにけり

木のもごごの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

(三) ふゆながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

(四) 笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影

の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を愛でぬ人もない。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を楽しませぬものもない。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見るここが出来ない。我等日本人の昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古今の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。入生の感は

不夜城

(一)伊藤仁齋の歌

(二)唐の劉延夢が「代悲白頭翁」の詩中の句

花を見て益々繁く、雪を見て愈々多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしめるよ。

一四 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も曇も天より降るものの面白からぬはなきが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風なき寒さに、雀ふくらむほどはともあれかくもあれ、そこ下す風に連れて、ちら／＼と降出づる始より、軒の玉水日に耀ふ光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、櫛の葉に堅き音立て、板底にはいたく跳返りなごしつゝ、さら／＼と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく、輕らかに

鹿子斑

天華

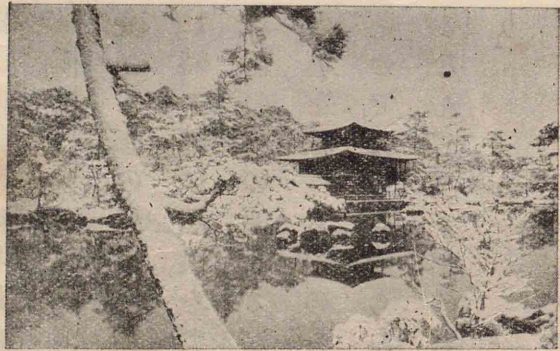
降りて、落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々しさも懐かし
く、消ゆる／＼も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を
見せ、松、梅、樅なんごの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむる
も趣あり。

されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、
陽氣すでに動きて陰氣なほいと盛なる時の事なり。寒さの甚だし
からねば雪細かならず、暖さいまだしければ雪は水めかずして恰
も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折
なれば、その霏々紛々として、盛に降るに當つては、櫻花の春天に翻
るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に
封じて仙境の縹渺を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、
樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼も
あやに美しき限りなり。

雪

すべて降る時の眺には、廣き所より狭き所好し。玉屑、珠塵いと清
きことは清けれども、もご色を奪ひ光を
障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠
きは全く見えずして、廣きは却つて狭く
なり、近きは聊か霞みて、狭きは却つて廣
くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは
市中の園よろし。

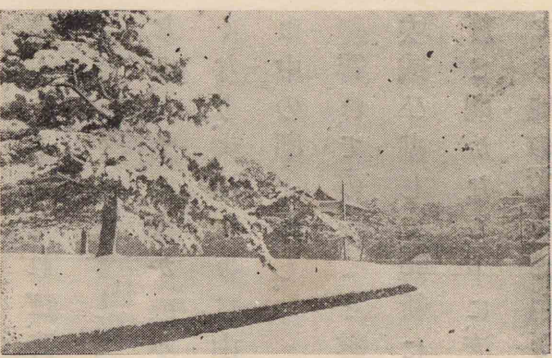
霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵
埃拭ひ盡して、鏡新に明らかなる、空の蒼
蒼と朗かなる下に、渣滓鍊去つて白銀曇
なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく
遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空
野の、取りどころなきだに面白く思はる。馬をさへ眺むるこ人のい



雪の關金

(一)「馬をさへ眺
むる雪のあし
たかな」(芭
蕉)

ひたる且朝日の光いと華やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。



雪の前城宮

西の京は金閣銀閣、眞如堂、岡崎、東山、清水
みな畫とすべく、梅尾、檜尾は見ねば知らぬ
ぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に
任せて千古冷やかに峙ち、潭は藍靨をた、
へて一脉徐に流る、雪の日の凍れる寂し
さに、翠蓋梢重く、壁の簪を戴ける松のむら
立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山
の禽の餓を鳴きたるなんど、二十年の昔の、
余の胸になほ鮮なり。

東の京は御溝の水穩に、浮寝の禽の夢も
安けく、雪に閑かなる大御代の午、またたぐひなくめでたし。山王臺

(一)長野縣福島町
の南方二里餘

(二)麴町區に在る
小丘、丘上に
日枝神社があ
る

(一)もと山王臺の
東南麓、今宅
地となつた

(二)隅田川の右岸
淺草公園に近
い小丘

(三)深川區越中島
より京橋區新
佃島にかゝる

(四)越中島の一、名

今なほ好からんが、溜池のありし昔いたづらに懐かし。不忍の池一
望千頃の景はいはずもあれ、石橋の小さやかなるを渡つて湖心に
至らんこそすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨
難き風情あり。暮れてなほ暮難き雪の闇夜に、何をか物いふ鴨のさ
ざめきを聞きたる、水に色なく、聲に白さありとやいふべき。隅田川
は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。
一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流る、川なりと稱ふべし。
相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でていふべきにはあらねど
も、南に涯なき海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干
の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶ
べく、賞すべく、ここをこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

— 洗心録 —

野營

野營はもと軍
隊語、ここで
は野宿といふ
意味。

(一)登山家、慶應
大學出身。

(二)大正十一年一
月七日。

(三)板倉勝宣、登
山家、この立
山登山の途中
凍死した。

(四)Quer sprung、
(横跳)

(五)立山の地獄谷
より發し、富
山灣に注ぐ。

尾根
山のみね。

(六)薬師嶽、海拔
二九八六米。

(七)Pricker、
(鶴嘴)

(八)三田幸夫。

(九)常願寺川の支
流。

雪の野營〔自修文〕

檣 有 恒

七日も重い荷を擔つて、重い雪の上を歩む。雪崩を避けては河原へ降り、河
水に行手を遮れては又登つたりした。鬼ヶ城の小屋は蘇生の休憩を與へる資格
はない。半ば雪から現れて、しかも圍板が方々外れてゐる。しかし私たちはこ
こに一泊するのだ。人夫衆が焚火の用意をしてゐる。三人は小屋の前で滑走す
る。板倉は盛にクウェヤー・シュフルングをやる。常願寺の川幅が狭まつて両
岸の尾根で隠れるあたりに、薬師であらう、夕日に薔薇色に輝いてゐる。その
緩やかな線が大きく弧を紺青の空にゑがき出して、頂のあたりに斷間もなく雲
烟が北にたな引く。
温度零下十二三度であつた。ヒッケルの鐵が手に付く。板倉は猿の上着に鈴
羊の下着、三田と私は馴鹿の袋にはいつて、互に自分の方が温いと自慢する。
吹曝しの中で不満のない言葉をかはしてゐる。三田は星が見えるといふ。山腹
に風の鳴る音が夜通し高かつた。
八日。依然として運ぶ足は重いが、湯川に入る頃から、高さの氣持がごごこ

もなく私たちを取巻いた。

湯川の沿岸は脆弱な火山灰で、少しの湿度でもすぐに底雪崩が時を選ばずに
起る。冬から春へかけては探るべき道ではないと思ふ。湯川の深く剝つた谷を、
飽くまで登りつめると、一段高くなつた雪の原がある。原といつても、もとよ
り湯川の作つた谷間の段丘に過ぎない。だがその奥にザラ峠の連りが、夏のぬ
るさを積雪で被ひ盡し、峨々たる峻険の相を誇つてゐる。原のすぐ近くに、軒
から上部を隠見させて、立山温泉の家が散在する。命のない家だ。或春であつ
た、イタリーのアマルフィの近くで、生活難から全村アメリカへ移住し去つて
棄てられた村を過ぎたころがあつた。崩壊した石灰色の壁に強い日がまぶしい
ほどに照つて、龍舌蘭などがいたづらに茂つてゐた。曾ては入舟出舟に賑はつ
た濱邊に、紫色がかつた波が靜かに卷崩れて、鞆々の響を繰返してゐる。ロー
マの都に二千年の昔をしのぶのではない、今になほその村の人たちは、茫漠た
るアメリカの野に、やはり同じい慘ましいパンの爲の勞苦を續けてゐるのだら
う。そして時折はその美しい故郷の夢を見て、暫しの慰安と係戀を得てをるの

(一)左良峠、立山
温泉から針木
峠へ行く途、
夏の云々は、
夏はゆるやか
である傾斜を
の意。
隠見す
かくれたり見
えたりする。
(二)小蘆爆裂火口
の跡に湧いた
温泉、海拔一
三〇〇米。
命のない家
人の住んで居
らない家。
(三)Amalfi。
龍舌蘭
まんじゆしや
げ科の大きな
多年生草木。
まんれんらん
ともいふ。

係戀
なつかしく思
ふこと。

人の句の云々
立山温泉の家をいふ

であらう。人の句のまだ消え去らぬ棄てられた住居は、その思がさまようてゐるやうだ。温泉の家に窓から飛びこむ。幽氣は十五名の荒男の活氣に破られてしまつた。尤も温泉には冬はない。

九日。終日雪降る。

十日。風雪。

十一日。好晴。粉雪なり。人夫數名を松尾峠に派して道つけさせ、一方數名羚羊狩に向かつた。彼等の輪かんぢぎの跡が遠く尾根の下まで走る。私たち三人は附近でスキー練習をなし、板倉に従つて教を乞うた。まことに空も靜かな、雪も軽い申分のない日和であつて、温泉から半里餘り上つた大林區の小屋の前に憩うて、紅茶など沸かして楽しんだ。

十二日。盛に再び雪降る。

十三日。松尾からザラの一帯が雲に没して、風聲盛に、薄く雪降る。人夫衆を勵まして、松尾峠上に約半量の荷を運ばせた。若し翌日の天氣が許せば、愈彌陀ヶ原に出ようとしたのである。九日より十三日に至る間、私たちは穴から

(一)立山温泉から彌陀ヶ原に出る道。

輪かんぢぎ
圓形のかんぢぎは雪をふむ具

(二)五五

大林區
國有森林原野等に關する事務を掌る役所。林區署に屬する。このは長野大林區で、小家はその出張所

(三)立山温泉の北方

無理な脚色の
ある生活
わざとかざつた生活。自然のままでない生活。

(一)常願寺川に沿つた村。富山方面から立山につて、立山登山組合事務所がある

自由消費
勝手に使用すること

(二)立山の一峰。海拔二八七二米
(三)立山の西。立山の一峰。海拔二九九八米

出てはスキーをなし、又も穴にもぐりこんでの蟄居であつたが、些かの惰氣もない。天候がたこひ私たちの活動を阻止しても、自然の力が溢れるほどに活躍して、私たちに無理な脚色のある生活をなさしめようとしな。いふまでもなく、かゝる不確實な日程の登山に際しては、食料の十分な餘力を必要とする。幸ひ芦嶮寺で佐伯靜氏より温泉場の貯藏の米や罐詰などの自由消費の好意を受けて來てゐるので、變化の激しい天候を相手に、落着いて待つことが出來た。十四日。透徹な風のそよぎが充ちわたる。日の光が頂をそめて、下へ下へこ這ふ。私たちは過去の苦痛を拭ひ去つたやうに忘れて、まぶしい白光の山と谷を眺めた。それは希望の朝の神が贈つてくれた晴朗な沈黙の世界であつた。私たちに見るものすべて憂の影もなく、行く所は皆晴々しい氣持に躍つてゐるやうである。松尾峠上に午後一時頃着く。何といふ喜であらう。隈なき晝の日に輝く山嶽を見渡して立つた。薬師からザラ、淨土、大日にかけて、或は遠く或は近く皆光つてゐる。劔の重々しい姿も奥の方からのぞいてゐる。久しい間人の世から離れて、獨り美しさを擅にしてゐた山の姿である。西北に彌陀ヶ原

(Spoon)匙のやうな格好をしたもの

綴る
間をまがりがつて通る

(Utopia) (理想郷)

(Spur) (轍)

の曠野が眼下に展開する。一行は勇み立つて、露營の用意にかゝつた。その場所
所は峠から三十分ほど東に寄つた鞍部である。まづ雪面を直徑二間くらゐの圓
形に深さ六尺くらゐ掘下げた。スクープで切つた角な雪が飛ぶ。焚木を用意す
る。炭火をおこす。案内や人夫衆の働は誠に小氣味がいい。穴の中に火が焚か
れて、人々はその周圍に小枝を敷いて休む。

三人は附近の疎林を綴りながら、小さい頭の上に出た。恰も日は音なく沈み
入る。山々に赤く名殘の映光を止めてゐる。寂しいが優しい色だ。冷やかな岩
と雪のみの世に、限りなく慕はしい大氣の漾ひだ。板倉はユートピアの出現だ
といふ。三人うち揃うて手を振り足を動かして、スキー踊をする。裸の白樺や、
雪を重げに負うた唐檜などの間から紫煙が昇るのは、露營地の在所なのだ。仲
間の中で術の一番優れた板倉の美しいシュプールを見返つて、二人均しく見こ
れてゐる。美しい線のうねりが、樹間を見事に縫つてゐる。若しも私たちの生
活のシュプールがこのやうにまぎ／＼と見せつけられるものであつたならばな
ごご語る。日は暮れた。燃す大きな火が盛に焰をあげてゐる。それがいかにも

十五の靈
同行十五人の
靈

(Schlaf sack) (ドイツ語) 寝る時にからだをおほふ袋

闇の中に生命の存在を強く歌つてゐるやうだ。私たちは又も毛皮袋に入つた。
夜は更けて行くまゝに、大方の福松もよく寝入つてゐる。平藏は何を考へてゐ
るのか、無言に火を見詰めてゐる。炎々と燃上つて崩れると思へば、千萬の火
の粉がごつと舞上る。陽炎が勢を失つて、空の暗黒にかき消されようとする邊
に、遠い星影が瞬く。靜かな憩だ。山も不可思議な思に凝つてゐる。まさしく
十五の靈は、床の雪のやうな清い呼吸をしてゐるのであらう。あすをも知らぬ
人の定めである。げに健闘に暮れた一日こそは、尊い人生ではなからうか。

十五日。明方になつて冴えた空は蔽はれて、星の光も遮られてしまつた。激
しい風の音が疎林を渡る。雪さへ少し降出して、皆一様に毛皮やシュラフザ
ツクの襟深く首を埋めた。漸く明けて見れば、蔽はれてはゐるが、雲も高く、
風も凧いだ。そして明るい日影が芦峰寺から富山一帯に照つて、次第に彌陀ヶ
原の方へ登つて来る。

風は西南で、山の峰を掠めて、雲の流が不斷に走る。板倉は空を見上げて、
このくらゐな天氣は北海道では上天氣の分だといつた。 — 山 行 —

一五 鶴の國

横山健堂

春には須く鶴を語るべし。鶴に駕し洞簫を吹いて白日登天するは、人間の夢想境にあらずや。

吾が輩鶴の國を觀て海峽の旅館に歸り、浴室に三助と背中を流させつゝ、鶴を語る。三助いはく、「僕本來北九州に生まる。少年時屢、白鶴の高飛して過ぐるを望みしことあり。白一點碧空に映じて、梅花一片飛んで天に上るが如くなりき」云。

五十年前には鶴の國到る所に在り、梅花開くところの村、鶴來らざるはなかりき。今鶴の國殊に少し。薩南の出水と周防の八代村とに僅かに王國を存するのみ。然れども昔の鶴の國は、鶴群を爲すに至らず。今の鶴の國は、群鶴百二三十羽に至る。恐らくは日本人開關以來畫中の外には、未だかくの如き自然の大鶴群を見ざりしなら

(一)馬關海峽

冲天の意氣

(一) Alaska, 北アメリカ最北の地方

ん。

動物園の飼鶴は姿態ありて意氣乏し。鶴の清高無比なるはその冲天の意氣ならずんばあらず。故に鶴は野鶴を第一とす。仙鶴といふは野鶴のことなり。

鶴は年々アラスカ地方より遠く萬里の天を高飛して日本に來る。脚下には茫茫たる大海横たはる。その翼を休ましむべき所なし。いかに健翼といふといへども、その勞想ふべし。鶴の脚に短冊を結びつくるは、鶴を愛する所以にあらず。

鶴はその雛を携へて萬里の飛翔をなす。雛鶴の翼疲るゝ時、母鶴はまさにその翼に抱きて飛ぶならん。母鶴も亦勞するかな。哀々の情、眞に想像するに餘りあり。

「燒野の雉子、夜の鶴」の語あり。夜鶴の研究は鶴の國にても未だ分明ならず。吾が輩は夜鶴よりも寧ろ飛鶴を想ふ。雛を携へてアラス

燒野の雉子夜の鶴

カより渡來する時、翼の力よりも愛の力なり。

鶴の王國は周防熊毛郡八代村なり。島田驛より自動車程、僅かに一時間にして登るを得べし。驛に沿ひて島田川あり、驛前には東北に一帶の青山天を劃りて、恰も南畫の一大屏風を列ねたらんが如し。自動車は川を溯り、青山を穿ち、千山萬壑を攀ぢて登る。

白露下りて鶴は來り、梅花開き盡して鶴は歸る。嚴霜未だ隕ちずして田に落穂ありて、田螺たじ或は鱒ますなど水田に餌の乏しからざる時鶴は群居す。天雪を飛ばす頃鶴は散居し、各餌を獵りて自營す。故に鶴を見るは紅葉の頃を最も佳しとす。

八代村は鶴の王國たるのみにあらず、千禽悉くここに集りて、天下の禽園を成す。禽園の盟主は即ち鶴なり。かくの如き廣大なる鳥の王國は、現世に恐らくは唯一無二なるべし。

鶴の王國は事實に於て人生の樂園たらずんばあらず。花卉珍草

亂山

茂生して、麗禽飛びめぐる。天地偏に愛らしきものに充たされて、毒蛇住まず。鶴未だ能く人家に馴るゝに至らずと雖も、必ずしも人を恐れず。

鶴の王國は海拔二千尺ばかり、亂山高下して四周し、自ら天半に別乾坤を爲す。その地高寒なるを以て石楠花しやくなげ多し。鶴歸り去るの後、春晚より石楠花順次に咲誇り、千溪の杜鵑争ひ鳴き、春より秋初に至るまで山鶯亂れ啼く。

鶴の國は鶴居らずと雖も寂寞たらず。霜の頃、鶴の一聲に千禽鳴りを靜むと雖も、鶴居らざる時は夏の禽鳥悉く得意顔して鳴く。

鶴の繁榮の下に千禽皆繁榮す。村の太陽寺は鶴の一名所なり。寺僧の語るところを聞けば、雉子の二三羽が寺の庭に遊ぶを見るは珍しからず。十三羽の山鳥、寺の立關に群來せしことありといふ。

白雲紅樹の青山を背景として、斜に段落をなせる水田の中に、五

白雲紅樹

偵兵

六十羽の鶴の群が展開せるを、正面僅かに一町ばかりの距離より見上げた時の雄々しく端麗崇嚴なる光景は、吾が輩をして暫く我を忘れて見入らしめたり。

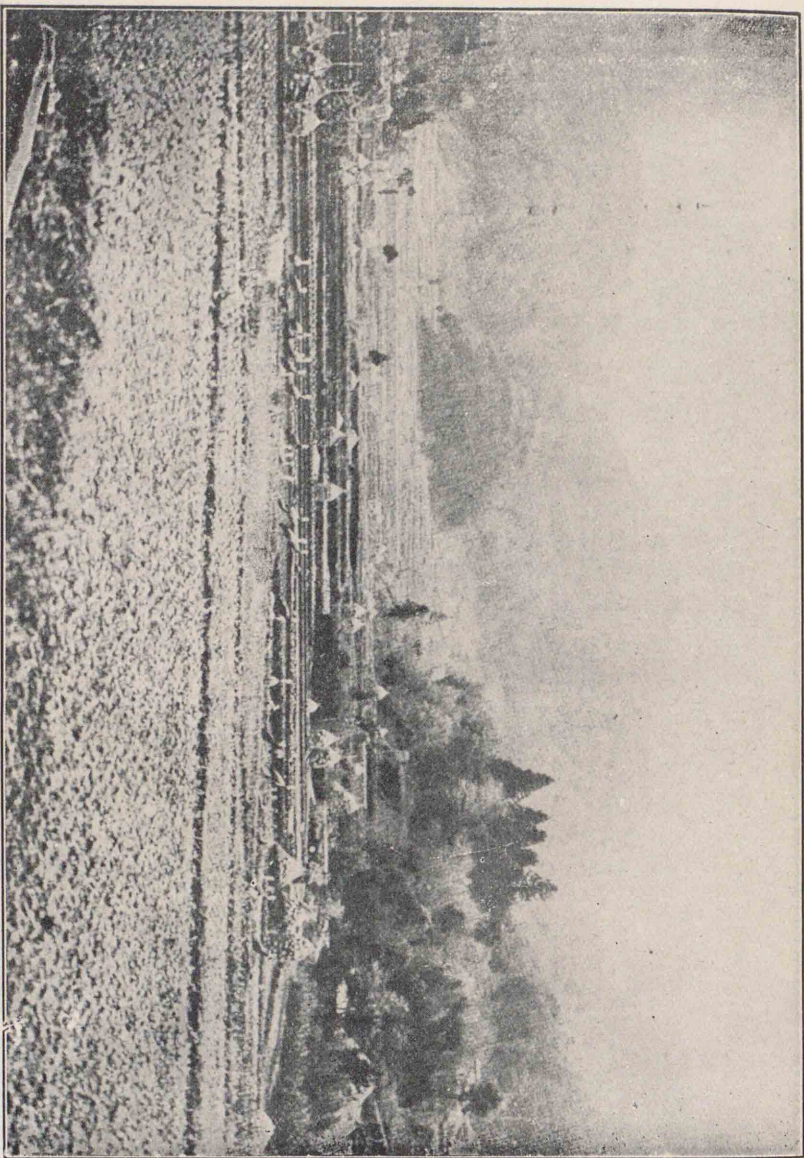
鶴群には必ず偵兵あり、全群皆餌を求むる時も、一羽は四方を觀望し、時々澄みて低き聲を發す。聲急なれば全群皆姿を整ふ。

嚙唳

村を遶りて皆青山なり。この日、秋天晴れて暖なれども、村をめぐるつて白雲あり。白雲は山の後より盛上りて、嶺上更に遠く奇峰を重ぬること、信州より千山を越えてアルプスを望むが如し。時に二三羽の飛鶴あり、聲雲に映じて嚙唳として聞ゆれども、姿は青山に染まりて見えず。

鐵騎

群鶴未だ起たず、意まづ改る。鳴聲恰も鐵騎の突出するが如く、一鶴より響き、聲聲急に鶴鶴に響き、極めて急なる交響樂の一刹那を演出す。一音、一音に應じて、五六十羽の野鶴悉く首を擧げ、姿勢を正



(村代八郡毛熊縣口山) 國 の 鶴

しくして、昂然として動かず。

白雲を天幕とし、紅葉青山を舞臺として、天界の雄士五六十羽を
の仙衣を整へ、胸を張り威儀を正して一齊に正面に注目せる光景
は、いかに莊嚴を極めたる大觀兵式の威儀も壓倒せらるべく見ゆ。
神秘なる交響樂すでに終り、餘韻雲に残りて鶴皆鳴かず。限りな
き森嚴と緊張の絶頂に達したる一瞬間、沈黙の夢の幕忽然とし
て揚る。精練せられたる兵士の一隊が行進を始めんとして、上半身
を前に乗出す一刹那の如く、無聲の號令の下に群鶴一様に胸を出
し翼を張るを見るや、憂然として長鳴し、百二三十の雄々しき翼の
羽ばたきの入亂れたる音に、憂々たる急鳴を交へて、思ひがけなき
交響樂を奏しつゝ、大空に向かつて舞上る。此の如き交響樂、人間未
だ夢想せず。

無數の月卿雲客その羽衣を翻し、天成の長き肉笛より迸る聲樂

憂然

算を亂す

の美しき急調子につれて、算を亂して大空に舞ひ舞うてひろがる。天にゑがけるが如き舞踏の群は、ひろがりたるまゝに散らず、入亂れつゝ、水平的に群れて行き、舞上り舞下り、或は沈んで低く村落の森をめぐり、或は高く登りて白雲を越えて青天に浮かび出づ。

天界の秋興酣なるらん、大輪郭をゑがきて大空を舞ひあるきたる群鶴は、興盡くるどころを知らざるべし。森を越え、邱を越え、鳴聲を地上に送りつゝ、その舞うて行きしところは見えず。吾が輩は天上の舞踏を見たり。この時夢にはあらず。

一六 人臣の道

北 畠 親 房

きほひ争ふ

凡そ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申す

前車の轍

べきにはあらぬにや。ましてさせる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに



北 有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしあれば、戒

親 めらるゝも理なり。

房 鳥羽院の御代には、諸國の武士の源平の家に屬すること、を停むべし。といふ制符度々ありき。源平久しく武をこ

制符

語らはる

りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれ

いひがひなし

言語は君子の
樞機
堅き氷は霜を
履むより至る

ば、いひがひなきことになりにけり。

この頃の諺には、一たび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては日本國を賜へ。若しは半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまで思ふことはあらしなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣、賊子といふものは、その初め心言葉を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。

—神皇正統記—

一七 我が國體と萬世一系の信條

皇
後
國家、神代、神代、
ノリ、タ、本、朝廷
ヨリ、三、宮、三、宮、
侍、儀、を、人、に、
三、宮、
二、宮、
白、玉、を、
白、玉、を、
大、皇、太、后、

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこの事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」とある通り、天照大神以來萬世一系の天皇を上戴着いてゐる我が大日本帝國が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは、我が日本に生まれた者の誰も心に思ひ、口にしてゐるところである。けれども、さてどうして我が日本が神の國として今日まで數千年の間傳はり、なほ將來もこの數千年間傳はつて來た言ふべからざる一つの力を以て進んで行くかといふことは、建國以來の歴史を味はひ、さうしてここに皇室と國民の關係を知り、それに依つて我が國體がいかに自然に發達して來たかを知らなければ、了解することは出來ないのである。

尤も從來傳はつてゐる日本の太古から上代に就いての歴史が、

信條

そのまゝすべて正確であるとは素より考へることは出来ない。しかしながらその中に含まれてゐる神話或は傳説の起原、及びその發達して來た途をたゞつて見て、その神話傳説が萬世一系なる歴史的事實を基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。又我が日本の上代の神話傳説の中に、この萬世一系といふ信條が生きてゐるとして在るのは何故であらうか。この意味に於て、我々は從來の傳説に囚はれた行き方でなく、寧ろ今日の文化史的研究の上に萬世一系の事實があるか否かを研究して見なければならぬと思ふ。

環境

これに就いての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふことを、地理的にも、生活狀態の上からも考へねばならぬ。その關係が我が日本にはいかに現れてゐるか、いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れ

相互依存

て來たかを觀察して見ねばならぬ。まづ我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸がよほど晚れる。随つてその社會には生存競争といふことよりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分がより多くその社會に現れたであらうと思はれる。まだ原始的の社會であつて、ただ自分等の目に觸れる範圍が世界の全體であること考へて居つた時代に於ては、若し我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山若しくは海で圍まれた高天原又は日高見國といふものであつたことすれば、その狭い小さな世界で一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、彼の強者が弱者を苦しめるやうな意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げること

に進んで行かねば、その社會は滅亡となるのである。この事は社會の一つの細胞ともいふべき家庭の組織に就いても考へ得ることである。随つて家庭の組織せられる本となつてゐる夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐたことは、神話傳説の中によく現れてゐる。さういふ風で出來た家庭は、夫婦親子の關係は極めて親密であつて、随つて平和な愛を以て結ばれた社會がここに成立つて來たことを信じ得る色々な條件が、日本の社會の發達の上に備つてゐる。

さてこの平和な社會の段々發達する具合を見ると、一番初には、別に専門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それが段々進んで來た時に於て、その社會の成立、その國民生活に必要な精神的や物質的分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうしてその家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱と

することに進んで行つたものである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前が出來てゐるのである。この場合に、それが又國家的組織と一致してゐるのが、即ち又我が國上古の氏族制度で、特殊な職業がなくて國家の最高地位を占められる家は、たゞ一軒しかないものであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。随つてこれを作る必要がなく、たゞ尊稱だけを作ればよろしい。今もお上とか、上様とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事であるやうに、大昔から我が皇室には御家名といふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮様と申すのみである。天皇陛下には「すめらみこと」即ち我々を統べてゐられる御方といふやうな意味の尊稱はあるが、それ以上に特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰といふ必要はないのである。

革命

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於てたゞ我が大日本帝國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國では皆主權者の家名がある。これは要するにも國民の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつたからである。日本の皇室はこの點に於て、社會發達の最初から主權者として今日まで繼續せられたことを、事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。若し日本にいづれの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主權者には必ず家の名前がなければならぬはずである。

國民的自覺
根本義

以上の所説によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根原となつてゐる根本義が了解せられるであらう。さうして我々がこの建國の昔に遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に

(一)第二十五代
(二)百濟の暴君

生きる。我々はその信仰を益々養成して行かねばならぬ。即ち歴代天皇は萬世一系を事實に於て永久に傳へることに御努力あり、我々日本國民はその意味に於て皇室を御助け申すことに於て努力があり、ここに始めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして前に述べた日本の最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推擴げたものが、この皇室と國民の關係となつたので、一に歴代天皇が、義は君臣であるが親みは父子のやうな大御心で國民に君臨せられ、隨つて神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方が御出でにならぬといふ美しい歴史となつて現れてゐるのである。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にあるのには、朝鮮末多王の事蹟が混入してゐることは、早く學者の定説となつてゐる。さうして仁徳天皇が民家の煙を御覽になつての御聖徳も醍醐天皇が寒

供御

式微

夜に御衣ゴロイを脱がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁徳天皇や醍醐天皇の御聖徳の上に現れてゐるので、仁徳天皇醍醐天皇のみが聖徳の天皇であらせられたといふのではない。後奈良天皇がその日の供御にも御困りになつてゐるほど皇室の衰微した時代にも、なほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられたことは、この皇室の式微から二たび盛な皇運の光がさして來た所以である。随つて我々日本臣民は、皇室の爲に身命を捧げて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を輔翼し奉ることが出来るのである。

神皇正統記にも、窮あるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけ給ふ皇になんおはします。といつてあり、又凡そ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど後の人を勵

まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。と述べてゐるのは、親房がいかによく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットーであらねばならぬ。

我々は、皇室の繁榮は同時に日本國の榮であり、日本國の幸福と一致する皇室の繁榮であるといふことでなければ、建國の大精神と矛盾するものと考へねばならぬ。又そこに始めて天照大神の神勅の意味が強く現れて、日本の國運と民福が進んで來るのである。即ち我々は外來の文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきである。皇室及び國體を忘れて、たゞ外來の文化に心酔して、國民的自覺を失ふことがあつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は永劫にこの大信條の下に進まねばならぬ。

——黑板勝美の文による——

一八 早春の賦

阿部次郎

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命に溢れる夏も、静かに澄渡りつゝ、鎮まり行く秋も、自然の生命の墓の中に温に雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しいにつけ、静かなるにつけ、悲しいにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢れるにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

しかしかくいふのは、余と容易に同化し難い季節と、余と最も調子の合ふ季節の差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや、雪の美しさを感じるには、余にとつては身神の特に強健で調節せられた状態が必要である。余の心の痛み易く感じ易い時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさよりも裸な土と

梢を揺る風の音の峻しさによつて、余の心は容易にかき亂される。これに反し、一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは、春の微に動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも日の光の肌に親しい頃、ぬくみ始めた細流の邊に青いものの漸く芽ぐむ頃である。その時、自然の生命の營はなほ半ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところのない伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力を盡して急轉するここをせず、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩やかな廻轉を開始する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰で急調の旋轉に堪へない余は、しかも内より温める力を自覺せずには生きがひを感じるこの出來ない余は、一年の中この季節に於て、最も自己の⁽¹⁾エレメントにゐることを感ずるのである。かくて余は、晴れた日はひこり野を歩き、丘を行き、春淺い雜木林の下蔭を

(1)Element.

行きつゝ、頬に冷たい風と背に温い日の光を貪り味はふ。書を読みつゝ、夢みるものは旅である。雨に籠つて夢みるものもまた旅である。

余は又早春に當つて特に幼年の時を回想する。土の下に黒くなつて凍つてゐた雪もいつしか解けて、温い日の光を吸ふ大地の面の日ごとに廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小流をまたいで獨樂を廻した時分のこと。雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、露の臺の青い頭を捜しまはる心のときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川の邊に腰を卸して、詩と人生を思つた少年の頃。思へばこれ等の人生の早春も、自分にはすでに流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は

又余の特愛する第二の季節に——こたびは木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ、羞ぢらひつゝ、すく／＼と伸行く晩春初夏の節に——入るのである。——北郊雜記——

一九 樹の根

和辻 哲郎

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、長いなじみである松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落附いた、潤のある鮮さを見せる。緑の葉は涙にぬれたやうなしをらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗

かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折ふしかはい
い小鳥の群が活き／＼した聲で囀り交して、緑の葉の間を樂しさ
うに往き來する。それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所
にたゞずんで、砂の中にくひこんだ複雑な根を見まもることが出
來た。地上と地下の姿が何とひゞく相違してゐることだらう。一本
の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに
比べて地下の根は戦ひ、もがき、苦しみ、精一はいの努力を盡したや
うに、枝から枝とわかれて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量
よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に
抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つては
ゐた。しかしそれを目の前にまざ／＼と見た時には、思はず驚異の
情に打たれぬわけには行かなかつた。私は長いなじみの間にこの

心臓で感ずる

やうな地下の苦みが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓
で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時
をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顔を見たのは、濕り
のない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。しかしその叫聲
や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活にかへつて、
苦みの痕をめつたにあごに遺さない。しかも彼等は、我々の眼に秘
められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美
しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやう
な苦勞の上にもみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親み
を感ずるやうになつた。彼等は我々とともに生きてゐるのである。
それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へな
かつた。

二一

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。上に伸びることを欲するなまづ下にくひいることに努めよ。

二二

早年にして成長のこまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下にくひいることに没頭してゐたからである。

私の知人にも理解のいい頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆をもちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、このやうな飛躍が彼の上になるか。私

地殻

没頭す

は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生まれるはずはない。

四

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど深いあぢはひを示してくる。

墮す

現代は、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ごもすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐるはしないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸すことが出来ない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれるはずがない。

偉大なものに對する崇敬は、又偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

五

教養は培養である。それが有効である爲には、まづ生活の大地にくひいらうとする根がなくてはならぬ。

人々は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸収する力のない所では、何の役にも立たない。私は教養の機會と材料が我々の前に乏しいとは思はない。ただそれに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。

— 偶像再興 —

養蟲と蜘蛛〔自修文〕

寺田寅彦

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に、大きな楓が空一杯に枝を擴げてゐる。その

枝に澤山な養蟲がぶら下つてゐる。

旺盛
さかん。
色彩
いろつや。

去年の夏中はこの蟲が盛に活動してゐた。いつも午頃になるとはひ出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食つてゐた。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數の小枝を坊主にしてしまふまでは、満足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。とにかく私は日々變つて行く葉の色彩に注意を奪はれて、しばらく養蟲の存在などは忘れてゐた。

しかし紅葉が干からび縮れて、やがて散つてしまふと、裸になつた梢にぶら下つてゐる多數の養蟲が、急に目立つて來た。大きいのが、小さいのが、長い小枝を杖のやうにさげたのが、枯葉を一枚肩に羽織つたのが、いろ／＼さまざまな恰好をしたのが、明るい空に對して黒く浮出して見えた。それがその日その日の風に吹かれて、揺いでゐた。

かよわい絲で吊されてゐるやうに見えるが、いかなる木枯にも決して吹落されないほど、しつかり取付いてゐるのであつた。縁側から箒の先などではね落さうとしたが、そんな事ではなかく、落ちさうもなかつた。

尖端

(Carnet) ざくろ石のこと。深紅色をしてゐる。

方錐形

よつ目ぎりのやうな形。

圓滑な

まるくてすべつこい。 Nickel.

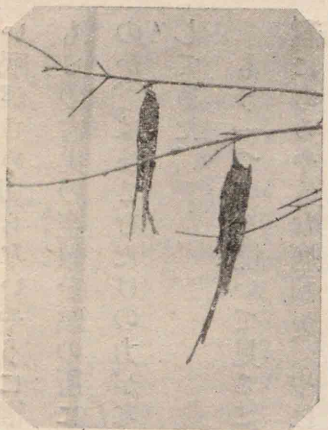
春がやつて来た。今まで灰色や土色をしてゐたあらゆる落葉樹の梢には、いつこなしにほうつこ赤味がさして来た。鼻の先の例の楓の小枝の尖端も、一つ一つ膨みを帯びて来て、それがちやうどガーネットのやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考へてゐるうちに、それまでにこの簞蟲を驅除して置く必要を感じて来た。

多分だめだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて来て、たゞき落しはね落さうとした。しかしやつぱり無効であつた。はねる度にあの方錐形の袋は、フロペラーのやうに空中に輪をかいて、廻轉するだけであつた。悪くすると、小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。今度は小さな鋏を出して来て、先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル鍍金の鋏の柄を縛り合はせるのは、餘り容易ではなかつた。

ぶら／＼する竿の先を、狙を定めて蟲の方へ持つて行つた。そして開いた鋏の及の間に、蟲の袋の口に近い所をくひこませておいて、そつこ下から突上げると、案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可なりに強い抵抗の爲に、細長い竿

は弓狀に曲ることもあつた。幸に杖を傷つけないで、袋だけをむしり取ることが出来たのである。

庭の楓のはあらかた取盡して、他の樹のも漁つて歩いた。結局數へて見たら、大小取交せて四十九箇あつた。それを一遍庭の芝生の上にぶちまけて、並べて見



簞 蟲

た。一つ一つの蟲の外殻には、やはりそれぞれの個性があつた。割に大きく長い枯枝の片を並べたのが大多數であるが、中には殆ど目立つほどの枝片は附けないで、濫紙のやうな肌をしてゐるものもあつた。えに似たの豆の莢をうまくつなぎ合はせてゐるものもあつて、それがのそ／＼はつて歩いてゐた時の滑稽な様子が、自ら想像せられた。

就中大きなのを選んで袋を切開き、蟲がどうなつてゐるかを見たいと思つた。竿の先の鋏を外して、袋の両端から少しづつ、蟲を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の繊維はなかく、強靱であるので、鈍い鋏の及は屢々切損じて、

漁る

とらうとしてさがし歩く。

外殻

そののから。

個性

そのもの特有な性質。

(一) 豆科に屬する植物の名。

強靱

ちやうど。

上滑
うはすべ
うはつらをす
べること

懶けに
いやさうに
たいぎさうに

干すばる
ひからびる

舍利

骨になつてひ
かたまつた死
がい

制裁

しおき

Persent

百に對する歩
合

1 Millimetre

一メートルの
百分の一約
我が三厘三毛
に當る

上滑りをした。やつと取出した蟲は、可なり大きなものであつた。紫黑色の肌が
はち切れさうに肥つてゐて、大きな貪慾さうな嘴は褐色に光つてゐた。袋の暗闇
から急に強烈な春の日光に照らされて、蟲のからだにどんな變化が起つてゐるか、
それは人間には想像もつかないが、なんだか酔つてでもゐるやうに、或はまだ永
い眠がさめ切らないやうに懶げに、八對の足を動かしてゐた。芝生の上に置いて、
もこの古巢の空殻を頭の所におつつけてやつても、もはやそれを忘れてしまつた
のか、はひこむだけの力がないのか、もうそれきり身體を動かさないうで、じつと
してゐた。

もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半が干すばつて舍利になつてゐた。
蠶にあるやうな病菌が、やはりこの蟲の世界にも入りこんで、自然の制裁を行つ
てゐるのかと想像せられた。しかし箕蟲の恐しい敵はまだ外にあつた。

澤山の袋を外からつまんで見てゐる中に、中空で蟲の御留守になつてゐるのが、
可なり多くのパーセントを占めてゐるのに氣が付いた。よく見てゐると、そのや
うなのに限つて、袋の横腹に直徑一ミリメートルかそこらの小さな孔がある事を

發見した。變だなと思つて鉋でその一つを切破つて行く中に、袋の中から思掛な
く小さな蜘蛛が一疋飛出して來て、慌しくどこかへ逃去つた。ちらりと見ただけ
であるが、それは淡い紫色をしたかはいらしい小蜘蛛であつた。

この意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐しい考が電光のやうに
閃いた。それで急いで袋を縦に切開いて見ると、果して袋の底に滓のやうになつ
た箕蟲の遺骸の片々が残つてゐた。あの肥大な蟲の汁氣といふ汁氣は、悉く吸盡
され嘗盡されて、たゞ一つまみの灰殻のやうな物しか残つてゐなかつた。たゞあ
の堅い褐色の嘴だけは、そのまゝの形を留めてゐた。それはなんだか兜の鉢のや
うな恰好にも見られた。灰色の擴穴の底に朽残つた戦衣の屑といつたやうな氣も
した。

この恐しい敵は、箕蟲の難攻不落と頼む外廓の壁上を、忍足ではひあるくに相
違ない。そして僅かな弱點を捜しあてて、そこに鋭い毒牙を働かせ始める。壁が
やがて破れたと思ふと、もう箕蟲の脇腹に一滴の毒液が注射せられるのであらう。
人間ならば、來年の夏の青葉の夢も見ながら、安樂な眠に包まれてゐる最中に、

擴穴
はかのあな

難攻不落
せめがたくて
なかくおち
ないこと

苦惱

くるしみ。なやみ。

殺戮

むごたらしくころすこと。

一分だめし
一分づゝためし斬にきること。

突然脇腹を食破る狼の牙を感じるやうなものである。これを拂ひ除ける爲には、
蟻蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする物を使はうとするが、餘りに窮屈
な自分の家は、身體を曲げることを許さない。最期の苦惱にもがくだけの餘裕さ
へもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、これは恐らく最も残酷なものの一
つに相違ない。全く無抵抗な状態に於て、そして苦痛を表現することすら許され
ないで、一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は、その十分の一にも足りない小さな蜘蛛の腹の中に消えてし
まつてゐる。残つたものは、僅かな外皮の屑と、そして依然として小さな蜘蛛一
疋の「生命」である。差引した残の「物質」は、どうなつたかわからない。

蟻蟲の繁殖しようとする所には、自らこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節
が行はれてゐるのであつた。私が蟻蟲を驅除しなければ、今に楓の葉は食盡され
るだらうと思つたのは、餘りに淺はかな人間の自負心であつた。寧ろたゞそのま
まにもう少し放置して、自然の機巧を傍觀した方が、よかつたやうに思はれて來
たのである。

調節
ほどよくかけ
んすること。

自負心

うぬぼれ。
放置す
ほつておく。

機巧

たくみ。

——冬彦集——

一一〇 十訓抄より

一 都良香

(一) 儒者。初名言
道文章博士
元慶三年(一
五三九年)歿、
年三十六
(二) 琵琶湖の北部
に在る

(一) 都良香、竹生島に参りけるに、眺望心にす
みて「二千世界眼前盡」といふ句を作りて、そ
の末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下し
て、「十二因縁心裏空」と、一句加へ給ひけり。

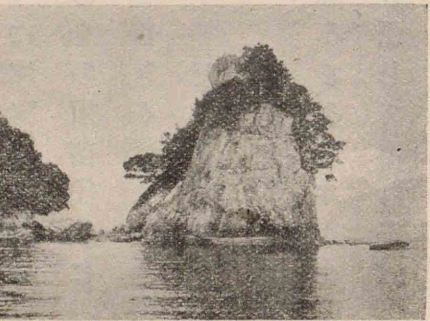
(三) 平安京の正南
門

同じ人羅城門を過ぐとて、「氣霽風梳新柳、

(四) 菅原道真、

髮」と詠じたりければ、樓上に聲ありて、「氷消
浪洗舊苔鬚」とついたりけり。良香、菅丞相の

御前にて、この詩を自讚し申しければ、「下の
句は鬼の詞なり」とぞ仰せられける。



竹生島

二 能因法師

(一)歌僧・後鳥羽天皇頃の人

(二)三島神社・愛媛縣宇摩郡三島町にある

(一)能因入道、伊豫守實綱に伴ひて彼の國に下りけるに、夏の日久しく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を國司頼りにすゝめければ、

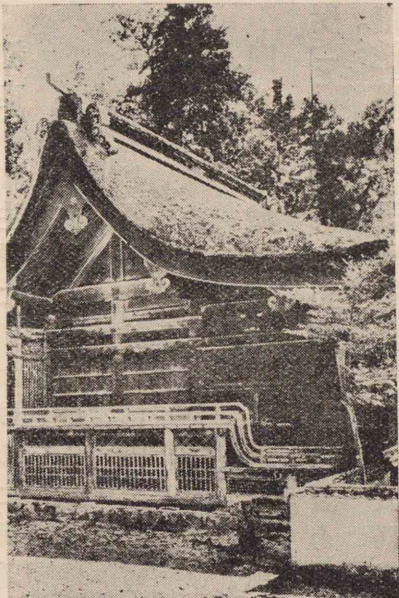
あまの川苗代水に

せきくだけせ

天降ります

神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて社司して申し上げさせければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大いなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりにけり。忽ちに天災を和ぐる(三)こと、唐の貞觀のみかごの蝗を吞めりし政にも劣らざりけり。



(國豫伊在) 社 神 島 三

みてぐら

(三)唐の太宗の貞觀は太宗の年號

念なし

(一)南河内郡天野村・行基の開基

能因は至れるすき者なり。

都をば霞ごにもに立ちしかご

あき風ぞふくしら河の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りて、色を黒く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。

三 松葉仙人

河内國金剛寺(一)かやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦みなし。よく食ひおほせつれば、仙人とも成りて飛びありく。といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やう／＼兩三年に成りにけるに、げにも身も軽くなる心地しければ、弟子どもにも、我は仙人になりなんとするなり。と常はいひて、今々さて、内々にて身

を飛びならひなごしけり。すでに飛びてのぼりなんこいひて、坊も何も弟子ごもにわかち譲りて、「のぼりなば仙衣を着るべし。」とて、かたの如く、腰に物をひこへ巻きて立出づるに、「我が身にこれより外はいるべき物なし。」とて、年ごろ秘藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に附けて、すでに出でにけり。

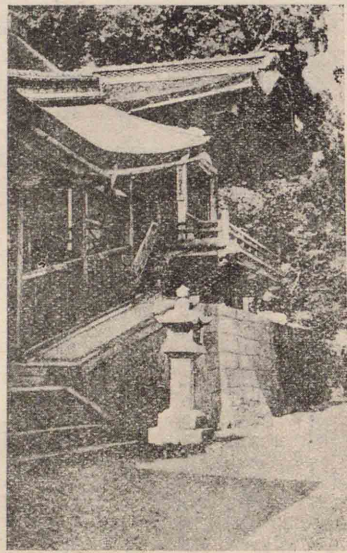
そば

弟子、同朋、名残を惜しみて悲しび、聞及ぶ人遠近市のごとくに集りて、仙に登る人見んとてつごひたりけるに、この僧片山のそばに差出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ昇りなんと思へごも、「まづ近く遊びて、事のさま人々に見せ奉らん。」とて、彼の巖の上より、「下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五丈ばかりありけるに、さかさまに飛ぶ人々目をすまし、あはれをうかべたるに、いかがしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うさ／＼として弱りにければ、飛びはづ

やうあらん

とかくして

して、谷へ落入りぬ。人々あさましく見れごも、「これほどの事なればやうあらん。定めて飛びあがらんずらん。」と見るほごに、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、たゞ死にに死ぬれば、弟子、眷屬騒ぎ寄りて、「いかに。」といへば、いらへもせず、纔かに息の通ふばかりなりけれご、とかくして坊へかき入れつ。ここに集れる人笑ひの、しりて歸りけり。さてこの僧、あるにもあらぬやうにて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も耻づかしながらあつかふあひだ、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年ごろいみじく食ひのこしつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、命ばかりは生くれごも、足手、腰も打折り



寺 剛 金

かどまり居たり

て起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、本の如く五穀食り食ひて、弟子ごもにゆゝしく譲りたりし坊も室も取返して、かどまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。

二二 夢で出會つた運慶

夏目漱石

(一)鎌倉時代初期の有名な佛師
(二)東京市小石川區音羽町、武言宗の名刹

下馬評

いらか



護國寺山門

運慶が護國寺の山門で仁王を刻んで居るといふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集つて、頼りに下馬評をやつてゐた。山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜に山門の蔓を隠して、遠い青空まで伸びて居る。松の

照合ふ

縁と朱塗の門が互に照合つて、見事に見える。その上、松の位置が好い。門の左の端を眼障にならないやうに斜に切つて行つて、上になるほど幅を廣く屋根まで突出して居るのが、何となく古風である。鎌倉時代とも思はれる。

「ところが見て居るものは、みんな自分と同じく明治の人間である。その中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立つて居るに相違ない。」

「大きなもんだなあ。」と言つて居る。

「何を拵へるのだらう。随分骨が折れさうだなあ。」とも言つて居る。

さうかと思ふと、「へえ、仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえ、さうかね。私やまた仁王はみんな古いのばかりかと思つて居た。」と言つた男がある。

「ごうも強さうですね。なんだつていひます。昔から誰が強いつ

端折る

委細頓着なく

て、仁王様ほど強い人はないつていひますぜ。何でも日本武尊よりも強いんだつていふからね。話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子を被らずに居た。よほど無教育な男と見える。運慶は見物人の評判には委細頓着なく、鑿と槌を動かして居る。一向振向もしない。高い所にのつて、仁王の顔の邊を頻りに彫抜いて行く。

運慶は頭に小さな烏帽子のやうなものを載せて、素袍だか何だかわからない大きな袖を脊中に括つて居る。その様子がいかにも古臭い。わい／＼言つて居る見物人は、まるで釣合が取れないやうである。自分はごうして今時分まで運慶が生きて居るのかなと思つた。ごうも不思議なことがあるものだ。と考へながら、やはり立つて見て居た。しかし運慶の方では、不思議とも希代とも頓と感得ない様子で、一所懸命に彫つて居る。仰向いてこの態度を眺めて

希代

大自在の妙境

居た一人の若い男が、自分の方を振向いて、さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁王と吾とあるのみだ。といふ態度だ。あつはれた。と言つて賞めだした。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見る。若い男はすかさず、あの鑿と槌の使方を見給へ。大自在の妙境に達して居る。と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫抜いて、鑿の齒を豎に返すや否や、斜に上から槌を打下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒鼻の側面が、忽ち浮上つて來た。その刀の入れかたは、いかにも無遠慮であつた。さうして少しも疑念を挟んで居らんやうに見えた。

「よくあゝ無雜作に鑿を使つて、思ふやうな眉や鼻が出来るものだなあ。」と自分はあんまり感心したから、獨言のやうに言つた。する

とさつきの若い男が「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つて居るのを、鑿と槌の力で掘出すまでだ。まるで土の中から石を掘出すやうなものだから、決して間違ふはずはない。」と言つた。

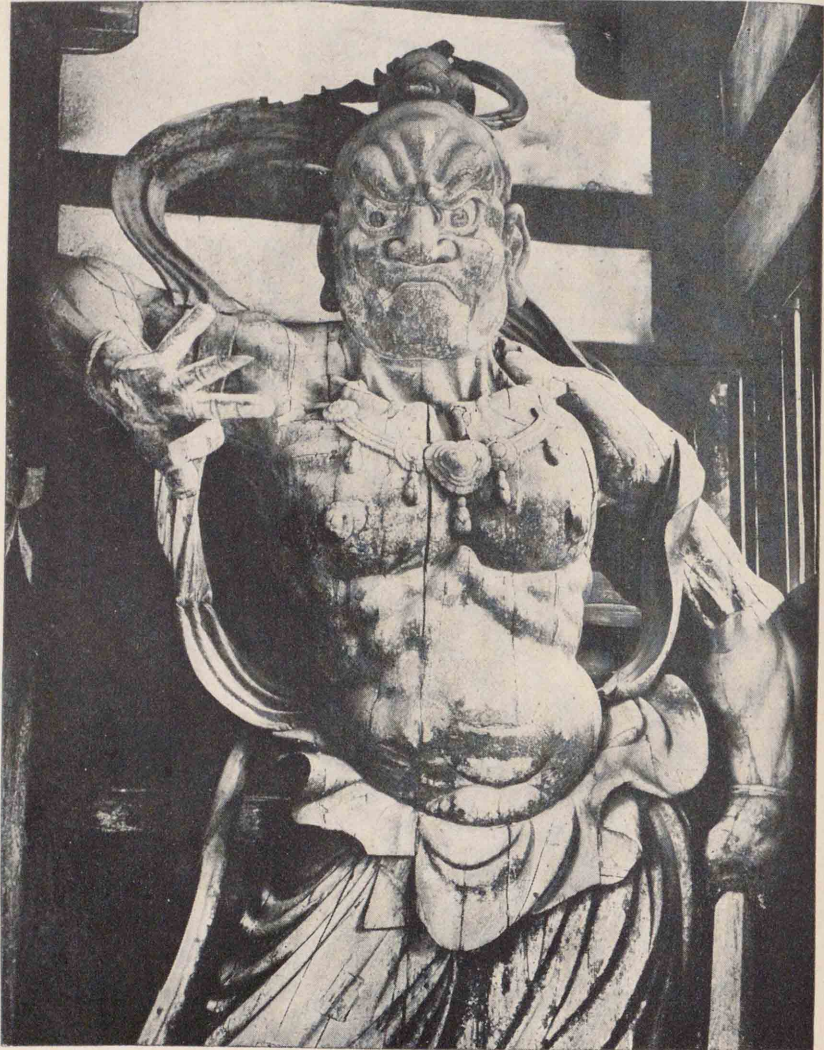


運慶快慶合作仁王
(東大寺南大門)

自分はこの時始めて彫刻
とはそんなものかと思ひ出
した。果してさうなら、誰に
も出来ることだと思ひ出し
た。それで急に自分も仁王が
彫つて見たくなつたから、見

物をやめて家に歸つた。

道具箱から鑿と金槌を持出して裏へ出て見ると、先達の暴風で倒れた檜を、薪にするつもりで木挽に挽かせた手頃の奴が、澤山積



二 王
(東大寺南大門)

んであつた。

自分は一番大きなのを選んで、勢よく彫始めて見たが不幸にして仁王は見當らなかつた。その次のにも運悪く掘當てることが出來なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、これもこれも仁王を藏して居るのはなかつた。終に明治の木には到底仁王は埋つて居ないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きて居る理由もほゞわかつた。

— 夢十夜 —

二二 東大寺

薄田 泣菫

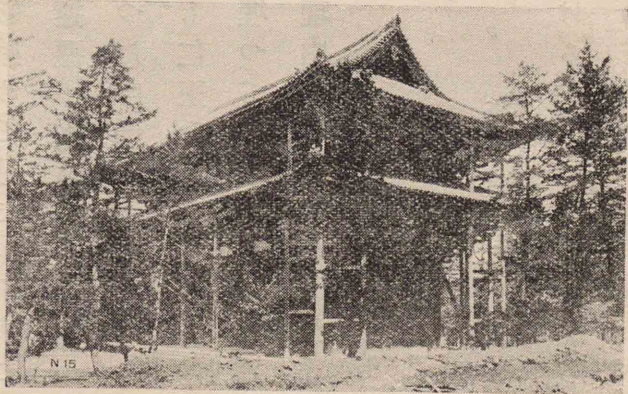
月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すく／＼と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に、木立の下路で迷ひでもするものな

(一) 華嚴宗の大本
山・奈良市に
ある。創建聖
皇の堂は即ち
大佛殿である。

いつかな

ら、きつと鬼の落した蠱まじものの係か蹄なにかゝつて、夜一夜歩き廻つたところ、いつかな路標を見つけることも出来なからうと思はれる。

南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱に凭もたれて、その立派な體をじつと空に擡たげてゐる。密迹、金剛二力士は、この靜かな宵にもその三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月光が、盜むやうに窓にこぼれて、肩から脹脛はざねにかけて、半身に流れる肉しむらの色がいかにも冷たく、又美しい。じつと見てゐると、儼しい顔のごこやりに追懷の「夢心地」が漂うて、靜かに息をつくか



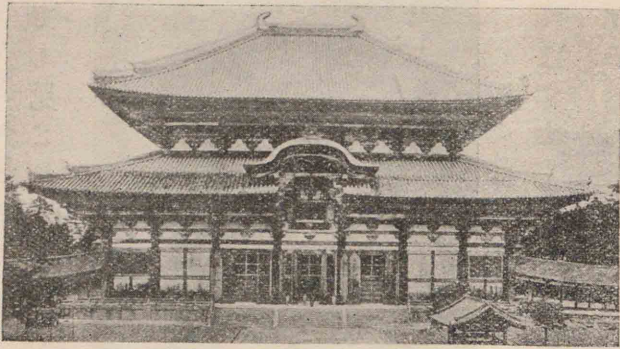
南大門

寶杵

居丈高

のやうに思はれる。しかしそれも一瞬の間で、再び寶杵を揮うて教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも屈大かうといふ長い廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもあるここか、ごこやりに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふ。あたりは又もこの靜寂に返る。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜かな夜をじつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。^(一)永祿の昔佛殿



屈託さう
燈明瞬く

^(一)永祿十年松永
久秀の兵火に
罹つた

が炎上してから後百三十餘の夏冬を佛はいつも露宿でいらせられたといふ。その頃は夢のやうな月夜の静けさに、酔心地になるまでも見られてゐられたであらう。ごことも知らず、十六夜薔薇の匂

ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れるながし目のやうな月明に濡れながら、又は佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたり(一)に沈み入る月影を眺めて、ひこり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、ごれほど美しく、又偉大なものであつたか。今宵それ等の追懷に、しみじみと寂寞の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。
あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵は、もう



佛 大 濡れながら、又は佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたり(一)に沈み入る月影を眺めて、ひこり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、ご

法界 閻浮の世

(一)生駒郡平城村の古名

(一)崇徳上皇。
(二)左大臣藤原頼長。保元元年(一〇六一年)八月、平家七敗死、年三十七。

(三)義朝の父。保元元年(一〇六一年)六月二十、殺された。
(四)頼朝の父。平治元年(一一九一年)八月、一を滅さうと謀り敗死した、年三十八。
(五)爲義の第八子。保元元年(一〇六一年)八月、大島に流され、嘉應二年(一一三二年)八月、三殺した、年三十三。

夜半過の心持がする。

一三三 鎮西八郎

(一)新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。(二)左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東、春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、並びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば(三)六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝(四)に附きて、多分は内裏へ参りけり。
(五)ここに鎮西八郎爲朝は、我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ。高名、不覺も紛れぬやうに、たゞ二人いかにも強からん方へ差向け給へ。たごひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。ごぞ申

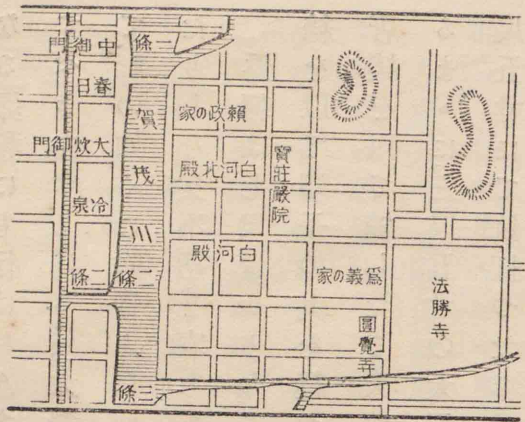
しける。よつて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎ぞぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘馬手に四寸伸びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなるとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのことし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を従へんとしければ、菊池、原田をはじめとして、所々に城を構へてたて籠れば、その儀ならば、いで落いて見せん。とて、未だ勢も附かざるに、忠國

矢つぎ早
不敵
不孝す

ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いに久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

(一)福岡縣糟屋郡香椎村・神功皇后を祀る



依宣旨執達如件。
然れども爲朝なほ參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲

源、爲朝、久住、宰府、忽諸朝憲、咸背、綸言、梟惡、頻聞、狼藉、尤甚、早可、令禁、進其、身。

解官

義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば我こそいかなる罪科にも行はれんずれ」とて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべき由申しけるに、「大勢にて罷り上らんこそ、上聞穩便ならず」とて、形の如くに附従ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て織したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しと

(一)漢の高祖の臣、智謀あり、高祖を授けて遂に偉業を成さしめた。
(二)おもに有名な兵法家。

(一)支那周代の弓術家、百歩距て、柳の葉を射、百發百中であつたといふ。

(二)假内裏、後白河天皇の御所。

心にくし
へろ／＼矢

するところを得、弓は養由をも耻ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまるらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、舉り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏まつて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども従へ候について、大小の合戦數を知らず。中にもせつかくの合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれ、強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること、夜討に如く事候はず。然ればたゞ今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。但し兄にて候義朝などこそ、駈出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして清盛などがへろ／＼矢、何ほどの事か候べき。鎧の袖にて拂ひ蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、

駕輿丁

掌を反す如し

御供の者少々射んずるほどならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。その時爲朝参り向かひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせんこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき」と、憚ることろもなく申したりければ、左府爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。年の若きが致すところか。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國争に、源平數を盡して兩方に在つて勝負を決せん、むげに然るべからず。その上南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信實、立實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて参るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見参に入り、曉ここへ参るべし。彼等待調へて合戦をば致すべし。又明日院司の公卿、殿上人を催さんに、参らざる者

むげに

(一)頼長の父忠實

先蹤

もをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、殘はなごか参らざるべき」と仰せられければ、爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちて泣きけるは、和漢の先蹤朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんこそ仕り候はん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。たゞ今押寄せて風上に火をかけたらんには、戦ふともいかで利あらん。敵勝つに乗るほどならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな」とぞ申しける。

——保元物語——

二四 白河殿夜討

白河殿にはかくとも知らしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏のさま見て参れ」と仰せければ、親久乃ち馳歸

(一)頼長

除目

物騒

り、官軍すでに寄せ候。と申しもはてぬに、先陣すでに馳來る。その時鎮西八郎申しけるは、爲朝が千度申しつるはここ候。と忿りけれども、力及ばず爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎これは何といふ事ぞ。敵すでに寄せ來たるに、方々の手分をこそせられんずれ。たゞ今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、たゞもこの鎮西八郎にて候はん。とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へ打出で、筋違に東河原に打渡り、堤を上りに、北へ向かつてぞ歩ませける。その勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押寄せたり。ここを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六。とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は、柏原天皇の御末なれども、時代

合はぬ敵

(一)桓武天皇、柏原院に葬り、柏原天皇といふ。

(一)源經基のこと、清和天皇第六の皇子貞純親王の長子にいふ。

(二)源義家。

下藤

裏かく

久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。と宣ひける。

景綱昔より源平両家天下の武將として、違勅の輩を討つに、両家の郎等大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ進らせたる身なり。下藤の射る矢立つか立たぬか御覽せよ。とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事もせず、合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しきに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。且は今生の面目、又は後生の思出にもせよ。とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以てはいだるに、七寸五分の丸根篋。中過ぎて篋代のあるを打食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎はやにはに落ちて死にたりけり。

舌を振ふ

(一)清原武則。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎すでに死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、この矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、「彼の先祖八幡殿後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則(一)が申しけるは、「君の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふことなし。抑、君の御弓勢を確かに拜み奉らばや。」と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重むさねを射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌、兵ども歸服しけり。と申し傳へて聞けば、かりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖し。とぞおぢあへる。

かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、「必ず清盛がこの門を承つて向かひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば、東の門か。」とあれば、兵皆、それもこの門近く

有るべうもなし

剛の者

候へば、若し同じ人や固めて候らん。たゞ北の門へ向かはせ給へ。」といへば、「さも言はれたり。今は程なく夜も明けなんぞ。されば小勢に大勢駈立てられんも見苦しかりなん。」とて引退くところに、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳。赤地の錦の直垂に、澤瀉緘の鎧に、白星の兜を着、二十四差いたる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、「勅命を蒙つて罷り向かひたる者が、敵陣こはしとて引返すやうやあるべき。續けや若者ども。」とて駈出でられけるを、清盛これを見て、「有るべうもなし。あれ制せよ者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。過すな。」と宣ひければ、兵ども前に馳塞がりけるに力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

ここに安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは、又なき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引給ふを見て、「さればとて矢一筋に恐れて、向かひたる陣を引く事やある。たご

猪頸に着

ひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても、度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん。さて駈出づれば、この高名はせぬに如かず。無益なり。と、同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、「夜明けて後に傍輩の『いで八郎の矢目見ん。』といはんには、何さかその時答ふべき。されば日頃の高名も失せなん。この無念なれば、よしよし人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。』さて、下人一人相具して、黒革緘の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。門前に馬を駈据ゑ、ものそのものにはあらねども、安藝守の郎等伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊強盜を搦め取ることは數を知らず、合

一定

戦の場にも度々に及んで、高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。と申しければ、爲朝一定きやつは引設けてぞいふらん。一の矢をば射させん。二の矢を番はんところを射落さんず。と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、駈出でて、鎮西八郎ここに在り。と名のり給ふところを、本より引設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふところを、爲朝よつ引いてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺を尻輪にかけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれて、溜るやうにぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆さまに落ちけるに、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳寄り、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、愈、この門へ向かふ者こそなかりけれ。

縫ひさま

— 保元物語 —

(一) 歴史家・文學博士・東京帝國大學教授・新瀨大正十三年六月三十日歿

一切經 佛典の總名

(二) 京都賀茂川の東部白河にその地域の稱

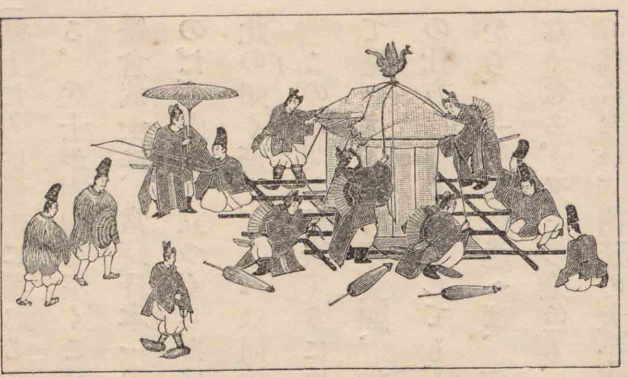
(三) 天台宗・白河天皇創建・今洛東岡崎法勝寺町に遺址がある

逆鱗 天子のお憤りになるの逆鱗に韓非子の龍が喉に逆鱗があつて、人のこれを取らうとするものがあれば怒つて殺してしまふ、人主にも亦逆鱗があるもの

大宮人と武士〔自修文〕
 萩野由之
 雨を歴史上から見ると、種々面白い事があるもので、雨を恐れると恐れぬとが、その時代の世態、人情を表してゐるやうに思ふ。

白河天皇が御位を堀河天皇に御譲りになつた後、佛法御信仰の餘りに、一切經を紺紙に金泥でお寫させになつて、それが出来上つた時、白河の法勝寺で供養をされる豫定であつた。ところがその日になつて大雨である爲に延期せられ、更に又期日を定めたが、この時も亦雨だ。次に延期した時も亦雨で、行幸が出来ない。都合三度延期したが、もはやこの上延期は出来ぬといつて、四度目に供養を行はせられたが、生憎その日も亦雨天であつた。そこで白河法皇は大いに逆鱗（けきりん）ましまして、「怪しからぬ雨ぢや。速に監獄へ送れ。」と仰せられて、その雨を器物に入れて、獄舎へ送られたといふことで、世にこれを雨禁獄といひ傳へてゐる。雨を禁獄したところでは何の効もあるまいが、かくまで逆鱗遊ばされたのを見て、御外出の時、雨がいかにか禁物であつたかが知られる。外出の時は晴天がよいといふのは、普通の人情であるが、昔の人の雨天嫌は

又特別であつたので、今の人の想像も出来ぬほど恐れられたものである。今一つの面白い例を次に挙げよう。



雨儀の鳳 建久六年の二月、奈良に大佛殿の供養があつた。これは聖武天皇の御建立遊ばされた大佛殿が、先年平重衡の南都征伐の時に兵火に罹つて焼失して、大佛の首も焼落ちたといふ騒。その後再建も出来なかつたのを、後鳥羽天皇の思召、又源頼朝の寄附や、俊乗坊重源などの勸化で、やつとこの度再建落成した。これによつて天皇も行幸あり、頼朝も鎌倉から上つて来て、供養に参列したのである。然るところこの供養の日が大風雨であつて、参列の公卿、百官、さては諸寺の僧侶たちも、全く困り切つてゐた。

然るに頼朝護衛の武士たちは、その大雨の中をびくともせず、列を正して密

(一) 治承四年十二月
 (二) 清盛の子・壽永三年一ノ谷の戦に義經の軍に捕へられ、後文治元年(八四五年)木津川で斬られた年二十。
 (三) 法然上人の高弟・元久二年(八六五年)歿

勸化 信者から寄附をつつることを

(一)天台座主、
を好み、和歌
に長じた、慈
鎮と諡する、
嘉保元年(一
七八五年)寂
年七十一

集してゐて、ごこを雨が降るかといふ面魂、平氣なものであつた。そこで京の人たちは驚くまいごこか、時の名僧慈圓僧正(一)などは、その事を記録に書留めて、「武士たちは皆雨に濡れることを何とも思はぬらしい。」と不思議さうに記してゐる。兵士が雨中を歩くごこや、立つてゐることが、何の不思議であらう。殊に鎌倉武士は、當時日本一のやうにいはれた武勇の士で、矢石の間をくゞつたものだ。雨中に立つくらゐは何でもない、當然な話ではないか。然るに京都人は此の如く驚く。これは何故であらう。

この疑問を解決するには、種々な方面から説明する必要があるが、まづいつて見れば、當時の貴顯、紳士の服装が、第一、雨に堪へないものである。裁縫の仕方は暫く別として、その地質は大抵糊で貼つて、艶を出したものが多から、一度雨に逢へば、忽ちだらりとする。折目正しい禮服も、忽ち見る影がなくなる。又その染色も、水に濡れると忽ち色がさめもし、他へ移りもするから堪らない。朝廷の大小禮は、大極殿や紫宸殿で行はれたが、その時、天皇は殿上に、文武百官は階下の廣庭に列立する。廣庭は青天井で、日覆もなければ

雨覆もないから、雨の日には衣冠は形なしになる。それゆゑ略式で濟ませる。こんな事情が續いて、次第に晴天でも略式を用ひ、終には朝儀も舉行しないやうになつたのである。

しかしこれはたゞ服装の一例を挙げたに過ぎないが、かゝる慣習が代々續いて來て雨に臆するから、身體も虚弱になれば、氣性も柔和になる。随つて活動することなどは、思ひも寄らぬやうになる。上流社會がすでにこの通であるから、上に倣ふ下で、下級の人民も段々勤勉が出來なくなる。國は衰へるのみである。

雨を恐れるところに亡國の氣分が漂ひ、雨の降るのも知らぬ風にびくごもしないところに、新興の活氣が漲つてゐるではないか。これ即ち平安時代の末に、朝權が日々衰へて、武家政治が新に興つた所以である。若し殿上の公達も雨を恐れないで、活潑に活動してゐたならば、政治の實權を武士に握られるやうなことがなかつたかも知れないのである。

— 讀史の趣味 —

心づから

つとめて

四つの始

あらはなり

はだれ

二五 春の樂み

貝原益軒

春はまづ一夜のほごに、あらたまの年立返る朝の空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はこごだつとて、貧しき家にも春盤なごいふものを設く。又土器取出で、大御酒進めて、まづつとめて父母に對し、次に自ら祝し、賓客にももてなすさまなど常に變りて、いごなんいみじうめづらかなる。時は今四つの始なれば、空の氣色やう／＼ひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山に霞の薄くたな引ける、さま／＼に物けざやかに見えて、冬の空に立變れる装、まづ春の來れるしるしあらはなり。垣根隠れに冬より殘れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名殘を惜しむべし。待ちわびし梅の匂百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へてももの若き聲、初春の初音のけふに逢へる、耳ごまり

(一)花ならで身にしむものは鶯のかをらぬ聲のほひなりけり
(風雅集、道因法師)

なづさふ
(二)韓愈のこと、唐の文豪、字は退之、文公は諡、長慶四年、西曆八二四年、歿、年五十七

(三)清少納言
(四)日の光敷しわかればいその上、ふりにし里に花も咲けり、(古今集、布留今道)

日永くして少年の如し

てこひしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むはこれまづ春の賜なり。これを始として、なほ行くさき遙かに榮ゆる春の豊なる恵たのもし。千年も經べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見なれしもいや珍しくなづさはれぬ。韓文公が最是一年春好處、(一)といへりしは、早春のけしき、一年のうちにて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。

如月のほごより、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたるよそほひ、殊に曙の景色譬ふべきものなくあはれむべし。古の人春は曙、(二)といひけんも宜なるかな。日の光敷しわかねば、數ならぬ垣根の内も、冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひうれし。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も古年より暇ありて忙しからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も

老いみいはけ

み
老いみいはけ
周代の哲學者
莊子、孟子と
同時代
唐の詩人杜甫
同じく唐の詩
人杜牧と對し
て老杜と稱せ
られる。大曆七
五年(西曆七
〇年)歿。七
年五十九

けぢめ



貝原益軒

麗かに霞み渡りたる景色、いと遙けし。夕づけて日はすでに入りぬれど、残れる日影なほ久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇る氣にや、童ども紙鳶といふものを造り、長き絲つけ、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたな引くを戯すれば、老いみ、いはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野には又絲遊といふもの霞の如く地より立騰れり。又かげろふともいふ。莊周はこれを野馬といふ。老杜が詩に「落花遊絲白日靜」といへるもこれならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。又垣根の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢめいと明らけし。花もやう／＼咲續きて、梅花すでにうつろひて後、新なるは我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたな引く雲の面影に立つ心地

消えがて

けおさる

(一)續古今集、藤原爲家の詠

うしろめたし

す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかこ見えて、いと麗し。櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かして、えならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花はみなけおされぬ。されど日ごろ待たせ／＼てやう／＼咲けるが、飽くまで見るほごもなく疾く散るは又恨めし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古人の詠みけんも、後の思出にせんごにや、情ふかし。このをりから、春雨のしき／＼降れば、我が宿の園の櫻はいかにかあるらんごうしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を忍がき出せるは、いさうるはしき眺なり。

春やうやく深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を争ひ、群花

(一)「驪子春猶隔
鶯歌暖正繁」
宋の人。名は
博希夷は號
太祖に仕へた

(二)「
歌管樓臺人寂
寂、秋院落
夜沈沈」(蘇
東坡)
(三)宋の人林希逸
の詩句

艶を競ふ折なれば、いづれの所か春のなからんや。かゝる景色に觸
れては、人の心も浮立ちて、思ふごちかいつらね、春を尋ねてあくが
れ歩き、ひねもす花をながめ暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわ
ざなれ。世の中のいみじくうれしき事のあるが中なるその一つな
るべし。我が心の樂みを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そ
ぞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に
空しきもこの折なり。杜甫が詩に、「鶯の聲暖にして正にしげし」とい
ひ、陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。
花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に醉
ひて、二つながら兼ねたる樂み、「春宵一刻值千金。花有清香月有陰」と
いふ詩を思ひ出でられぬ。又「惜花朝起早。愛月夜眠遲」といへり。古人
はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむ
きて、空しく臥すはいと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたき

(一)宋の人周彌の
詩句

(二)白居易の詩句
(三)支那南北朝時
代の詩人謝靈
運が夢中に得
たといふ詩句

(四)京都府綴喜郡
山吹の名所
めかれせずな
がめがちなり

つらくに
(五)「巨勢山のつ
らつら椿つら
つらに、見れ
どもあかず巨
勢の春野を」
(萬葉集 阪門
人足)
いどましく

をも知らで、朝起くることおそきは、花を惜しまざるなり。この頃夕
暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば「春風入、燒
痕」といひ、又「野火燒不盡。春風吹又生」といへるも、燒野の草を詠ぜし
なり。古詩に「池塘春草生」といへりしは、この頃の眼前の景色をたゞ
ありのまゝにいへるなるべし。
彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見ると心地
して賑はしければ、めかれせずながめがちなり。春の花の多かる中
に、たゞ山茶のみ異花にかはりて盛久し。殊更つらをなして植ゑた
るつらく、椿つらくに見れども飽かず。階のもこの薔薇も夏を
待ち顔なり。
すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遅
く疾く咲きつゞき、醃醃に至りて花のこゝ終りぬるは、名殘惜しと
見ゆ。春の花はいづれさなく咲出づる色ごとに、目驚かれぬるに、心

(一) 惜しめども 春の限りの夕暮にさへなり
 (二) 蘇子瞻が「青雲還一夢」とい
 (三) 宋の文豪蘇軾
 號は東坡の字
 瞻はその字
 徽宗の初年
 (西暦一〇一
 六年)歿、年六
 十六

短くて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいと長けれど、何く
 れごまぎらはしく、風雨も亦しげければ、爲す事なくはかなく過ぎ
 て、ごめあへぬ春の限りのけふの日の夕暮にさへなりぬ。落花寂
 寂たる黄昏の時は、名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」とい
 へる、うべなるかな。

——樂訓——

二六 北海の春の詩

三 木羅風

よろこばしき日の光よ。
 或は青空、或はかゞやく雪の原、
 或は節奏的に屋根より落ちる玉だれ、
 或は愛らしき水のせゝらぎ。
 靜かなる光の洪水窓にそゝぎ、

空氣は新しき薫と歌に満ちて
 卓上の白磁の壺をめぐり、
 霧をさす、海老色の窓帷に。
 さしもに冬の幾月、黒き暖爐は
 重き精力と思想に倦み、
 冷たき骸となりて灰積りぬ。
 あゝ、讀書に過ぎし長き幾月。
 そよろぐ風は曠野を過ぎて、
 草の色まだ淺き丘の上に、
 羊ら丸くなりて、雲漂ふ。
 あゝ、四月。五月。北國の春。

——牧神詩集——

二七 仁は心のいのち 室鳩巢

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心死するほごに、仁は心のいのちも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、物のあはれを知りて、常にいきたる物ぞかし。よりにて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずることを知り、不義を聞いては必ず耻づることを知る。若し情なくあはれを知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもちて自愛し、何をもちて恭敬せん。義を聞いて感ずることなく、不義を聞いても耻づることなかるべし。ここをもていふに、仁義禮智いづれ

齒徳 遜讓

も心の徳にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も、禮も、智も、そのさまありその用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。この故に仁に心の徳といひて、外に徳をいはず、仁に愛の理といひて、外に

理をいはず、そのいはざる所に深き意ありと知るべし。



室鳩巢

州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平

家を語らせて聴きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞあはれなる事を聴きたくこそあれ。その心得して語り候へ。」といへば、法師「心得候。」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。さて「今一曲前の如

(一)豊臣時代の武將佐野伯長のこと、慶長六年(一六二九)歿、年四十四

雨雫と泣く

くあはれなることを聽きたし。』といへば、那須與市宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、『過ぎし日の平家はいかが聽きつる。』といふに、家臣ども最も面白きことにて候。但し我等ども一つ心得ぬことこそ候へ。前後二曲ともに勇烈なることにて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽せられて候。これはいかがの事にて候にや、今に不審なる事にいづれも申し合ひ候。』といへば、天徳寺驚きて、たゞ今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて、力を落して候。まづ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生暖を高綱に賜はるにあらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。あはれならぬことか

武邊
迷惑す

惻隱

は。』とて、しばしば涙を拭ひつゝ、しばしありて言ひけるは、那須與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的にむかふに至るまで、源平両家鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道ほどあはれなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのものしからずこそ候へ。』と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、もこより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するに非ずや。然るに

武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、いはば仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況やその餘の事は、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひ渡りて發するに非ざれば、眞のものにあらず。これ即ち前にいひし人に情あり物のあはれを知るの心なり。すべて諸の言行ともに、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙をこぼすやうにだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者といはん、に何の疑かあるべき。

— 駿臺雜話 —

二八 扇の的

さるほごに阿波讃岐に平家に叛きて源氏を待ちけるつはものごも、あそこの嶺、ここの洞より、十四五騎、二十騎打連れ打連れ馳來るほごに、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負

尋常にかざる

五つぎぬ

舟のせがい

矢おもて

てだれ

小兵

を決すべからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常にかざりたる小舟一艘、汀へ向かつて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つぎぬにくれなるの袴着たるが、皆くれなるの扇の日出いたるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向かひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとこそ候らめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽せられんところを、てだれに狙ひて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官みかたに射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。と申す。判官證據があるか。とさん候。かけ鳥など

いろふ

仔細を存す

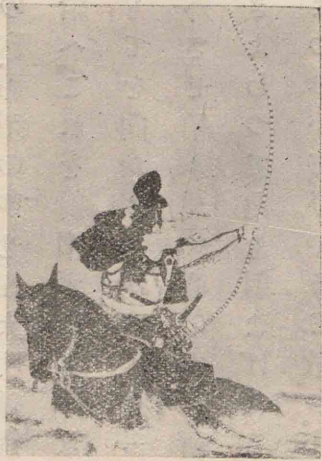
一定

をあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官さらば與市呼べ。とて召されけり。

與市その頃は、いまだ二十許の男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂にもよぎ緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わりあはせてはいだりけるぬだめの鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挟み、胄をば脱いで高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。判官、いかに與市、あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし。と宣へば、與市つかまつつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん。と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國に向かはんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へ

御説

かへらるべし。とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば、悪しかりなんこや。思ひけん、さ候はば外れんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。とて御前を罷り立ち、黒き馬の太く逞しきに、まるほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいく



那須與市

須つて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方の兵ども、與市が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候。と申しければ、判官またの

もしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらん。そこを見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆり

(壽永三年)

くしに定まら
ず

はれならずと
いふことなし

ひいふつと
一もみ二もみ

あげ、ゆりすゑて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一めんに並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも、はれならずといふことなし。與市目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向かふべからず。今一度本國に歸さんと思し召さば、この矢外させ給ふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與市鏑を取つて番ひよつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑はうら響くほごに長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。

皆紅の扇の日出いたるが、夕日にかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷をたゞいて感じたり。くがには源氏舷をたゞいてごよめきけり。

——平家物語——

二九 平安京

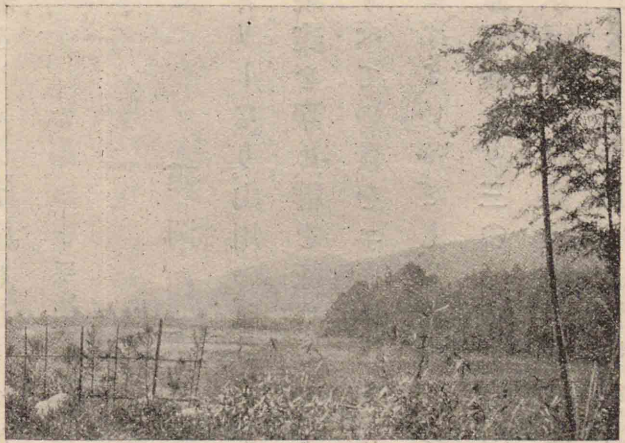
藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり。東亞のイタリ一なり。山川の風景行く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあ

曄麗
幽婉

子の日の遊
宮柱太知る

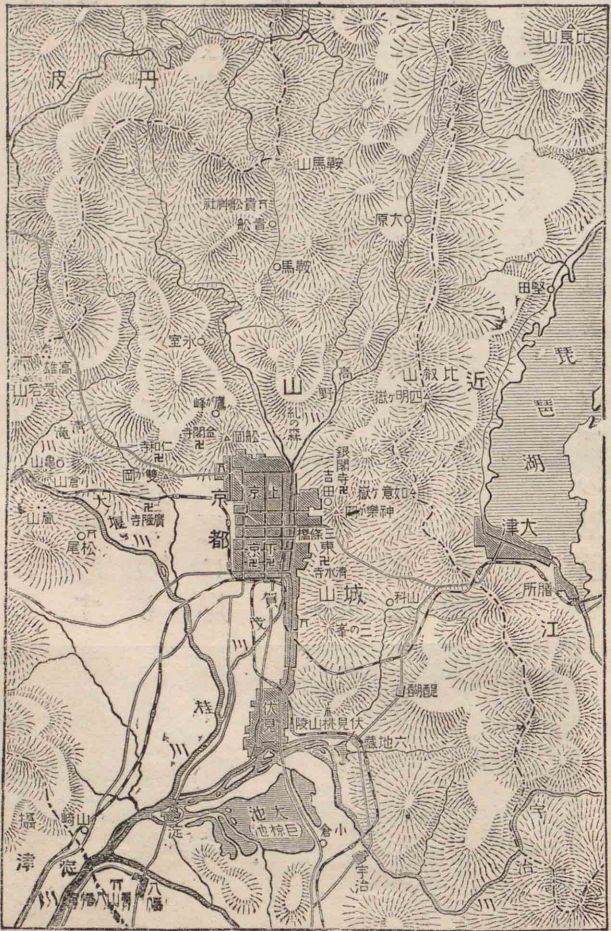
り、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の双が岡は、大和の畝傍、香山、耳無の三山の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬところから、南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。



岡が双

京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍

浩蕩
跌宕



に清瀧をあはせて、琴の音涼しく亦南に向かふ。三川南に合し、更に淀の急流に流れこみ、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面よりいへば、山のうちに籠りて海を見ざるは、又それだけの長所なくんばあら

勾配

Alkali

ず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なき代りに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべし。雖も、海なくして清き京都は益、清きなり。

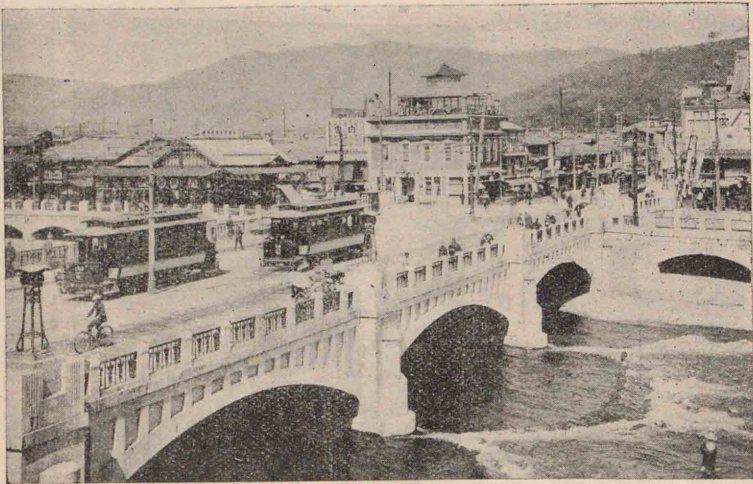
山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何所の山水も日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸



清 瀧 川

(一)「蒲團着て寝たる姿や東山」(嵐雪)



賀 茂 川 よ り 見 た る 東 山

氣の然らしむるどころなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊にこまやかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。我が數年の滯留中、下京より吉田に通ひたる朝な朝な景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ、彼方へ彼方へ淡くなりて、向ふに寝たる東山はあるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に

並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色の又よその國には見られぬさ



大原女(花賣)

まよ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨ご思ふうちに、はら／＼と面を撲つ。あはやと驚きもはてず、雲は去りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、

今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

— 國文學全史 —

二百里
東京から京都まで
(-)京都市下京區、今の京都驛。

京に着いた夕 (自修文)

夏目漱石

汽車は流星の疾きに二百里の春を貫いて、行く吾を七條のフラットホームの

山河襟帶

黒いもの云々
黒い汽車の黒い煙突から火の粉を吐いたのをいふ

(一)眞葛原は京都市東山の麓にある

(二)いづれも京都の大通、一條より南へ九條までである

依然として少しもかはらずに

會釋
るんりよ、よ
うしや。

(三)當時の京都帝國大學文學科大

學長文學博士狩野亨吉

(四)現第一高等學校教授文學士菅虎華氏は禪を鎌倉圓覺寺に學んで授けられた

上に振落す。余が踵の堅い敲きに薄寒く響いた時、黒いものは黒い咽喉から火の粉をはつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。

たゞさへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に賀茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、悉く昔のまゝの原と川と山である。昔のまゝの原と川と山の間にある一條、二條、三條を盡して九條に至つても、十條に至つても、皆昔のまゝである。數へて百條に至り、生きて千年に至ることも、京は依然として淋しからう。この淋しい京を春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振落された余は、淋しいながら、

寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北のはてまで通らねばならぬ。

「遠いよ。」と主人が後からいふ。「遠いぜ。」と居士が前からいふ。余は中の車に乗つて顛へてゐる。東京を立つ時は、日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。きのふまでは擦合ふ身體から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱い血が汗を吹いて、總身ににじみ出はせぬかを感じた。東京はさほごに烈しい所である。この刺戟の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛下りた余は、恰

京に着いた夕 (自修文)

三伏の日
夏の土用の日
光
空を映さぬ云
木がこんもり
とおほひかぶ
さつて暗い池
倏忽
にはかに、た
ちまち
轆
かち棒

ぜんざい
汁
淡い煮小豆の
人一人ぬない
人氣のない
人一人ぬない
第五十代都
を奈良から始
めて京都にう
つされた方で
ある
御宇
御代

も三伏の日に照附けられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ落ちこんだやうなものだ。余はしゆこいふ音こももに、倏忽と吾を去る熱氣が、靜かな京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ。」こいつた人の車と、「遠いぜ。」こいつた人の車と、顫へてゐる余の車は、長い轆を長く連ねて、狭く細い路を北へ北へ行く。靜かな夜を聞かざるかど、輪を鳴らして行く。鳴る音は狭い路を左右に遮られて、高く空に響く。「かんから、かんから、かんから。」こいふ。石に逢へば「か、かん、かんから。」こいふ。陰氣な音ではない。しかし寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に両側から仕切る家は悉く黒い。戸は残りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提燈が見える。赤く「ぜんざい」と書いてある。人氣のない軒下に、ぜんざいは抑、何を待ちつゝ、赤く染まつてゐるのかしらん。

桓武天皇の御宇に、ぜんざいが軒下に赤く染抜かれてゐたかは、わかり易からぬ歴史上の疑問である。しかし赤い「ぜんざい」と京都は到底離されない。離されない以上は、千年の歴史を有する京都に、千年の歴史を有するぜんざいがなくてはならぬ。

有史以前
歴史が始る以前
前のずつと遠
い昔、ここで
は自分が生ま
れる以前から
を大げさに書
いたもの
有名宿屋

第一印象
最初に受けた
感じ

眼前に髻髻する材料もない
はつきりしない
いながらも目の前に思ひ浮
かばせる材料
さへない



ぜんざいの提燈

桓武天皇の昔は知らず、余とぜんざいと京都とは、有史以前から深い因縁で互に結びつけられてゐる。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一緒であつた。麩屋町のひらぎ屋とかいふ家に着いて、子規とともにも京都の夜を見物に出た時、始めて余の目に映つたのは、この赤いぜんざいの大提燈である。この大提燈を見て、余はなぜかこれが京都だなど感じたざり、明治四十年の今日に至るまで、決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは、余が當時に受けた第一印象で、又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだにぜんざいを食つたことがない。實はぜんざいの何物たるかをすら辨へぬ。汁粉であるか、煮小豆であるか、眼前に髻髻する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻

絲瓜云々
子規の辭世の
句一絲瓜咬い
て痰のつまり
し佛かなに
よつていふ

の閃ひらめきのうちに思ひ出す。同時に——あ、子規は死んでしまった。絲瓜へちまの如く干枯ひかびて死んでしまった。提燈はいまだに暗い軒下にぶら／＼してゐる。余は寒い首を縮めて、京都を南から北へ抜ける。

車はかんから、んに桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、頻りに駈ける。前なる居士は黙つて乗つてゐる。後なる主人も言葉をかける氣色けしきはない。車夫はたゞ細長い通をどこまでもかんから、んと北へ走る。成程遠い。遠いほど風に當らねばならぬ。駈けるほど顛へねばならぬ。余の膝掛と洋傘は、余が汽車から振落された時、居士が拾つてしまった。洋傘は拾はれても、雨が降らねばいらぬ。この寒いのに膝掛を拾はれては、東京を出る時二十二圓五十錢を奮發したかひがない。

かんから、んは長い橋の袂を左へ切れて、長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を一つ越えて、藁葺ふせうのとも思はれる不揃ふぞろひな家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱かかか五抱もある大樹の幾本もなく提燈の火にうつる鼻先で、びたりと止つた。

(一)賀茂川にかゝつた橋

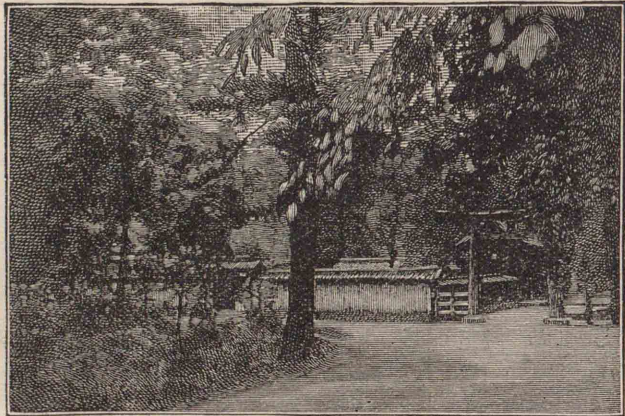
料峭りょうせう
ひとく寒いこ

(一)京都市の東北
部、下賀茂神
社の境内

寒い町を通り抜けて、よく／＼寒い所へ來たのである。遙かな頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平ほどの奥に、料峭りょうせうたる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來どこへ寝るのだらうと考へた。

「これが賀茂(一)の森だ。」と主人がいふ。「賀茂の森がわれ／＼の庭だ。」と居士がいふ。大樹を繞つて逆に戻ると、玄關に燈が見える。成程家があるなと氣がついた。

玄關に待つ人は坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顛へながら飛びこんだ客は寒がりである。



賀茂の森

——漱石全集——

流露

〔曹操〕短歌行「
 一月明星希
 鳥鵲南飛」
 〔Frederick
 the Great
 〕(西曆一七七一
 年)一七七八
 年) Sans Souci
 〔Sans Souci
 〕ベルリンの近
 郊ポツダムに
 在る。
 景慕

三〇 文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人か
 ら見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國
 の品格も一段と高く見え、文學の嗜のある偉人は、一入懐かしい心
 持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物
 であるが、樂を横たへて、^(一)月明らかに星希に、^(二)と歌つた一事を思ひ出
 す、何となく慕はしくなつて來る。^(三)プロシヤのフレデリック大王
 は賢君として名高いが、そのサンスシー宮中に佛國の文豪と交つ
 て、文學に耽つたことを考へると、なほ更貴い感じを起す。英雄閑日
 月ありといふ語がしみとく、身に染みて、景慕の念を生ずる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、
 勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな。と詠んだ風流衣川に



ルーフデック大王文豪のテールと語る

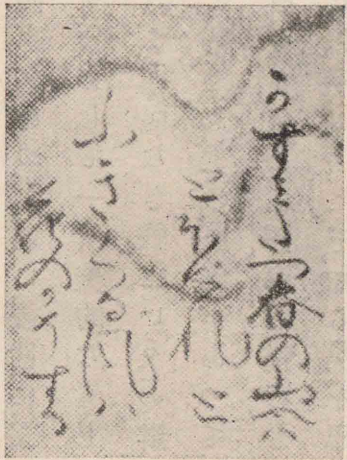
(一)「登るべき便なき身は木の
下に、しひを
拾ひて世を渡
るかな」
(二)「時鳥名をも
雲居にあぐる
かな、弓張月
ののくに任せ
て」
(三)「埋木の花さ
くこともなか
りしに、みは
なる果ぞあは
れなりける」
(四)「とて世に
もあらぬ身の
かりのちぎり
をいかで結ば
ん」
(五)「歸らじとか
ねて思へば梓
弓なき歌とに
どむる」
(六)「有明の月も
あかしの浦風
に、波ばかり
こそよると見
えしか」
(七)「陸奥のいは
でしのはえは
ぞ知らぬ、は
きつくしよ
み」

矢を番つて、衣のたてはほころびにけり。と呼止めた情致がある爲
で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出来ぬ
ごころ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬ
が、弓張月のいるに任せて、「埋木の花さくこともなかりしに」なごの
韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小
楠公をして一層美的ならしめるのは、「かりの契をいかで結ばん」の
歌と、梓弓なき數にいる。「の辭世である。平忠盛に「波ばかりこそよる
ご見えしか」の風流があつて、眇の俄殿上人も、優にやさしい感じを
與へる。これは淨海入道の及ぶごころではない。頼朝の「陸奥のいは
でしのはえぞ知らぬ」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは
思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚が交つてゐたらう
ご想像せられる。

その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第

かすみたつ
春の山へは
とほけれど
ふきくる風
は花のかそ
する

一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、ここに最大な發達を遂げてゐる。頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で



傳 源 實 朝 筆 蹟

風流譚のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久の語草である。
武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくて

あらためて
なをかへて
みん深雪山
うつもるは
なもあらは
れにけり松

(一)「霜滿軍營」
秋氣清、數行
過雁月三更、
越山併得能州
景、遮莫家鄉
憶遠征。

(二)越後の人、山
城守と稱する。
元和五年(二
年六十、
想望す

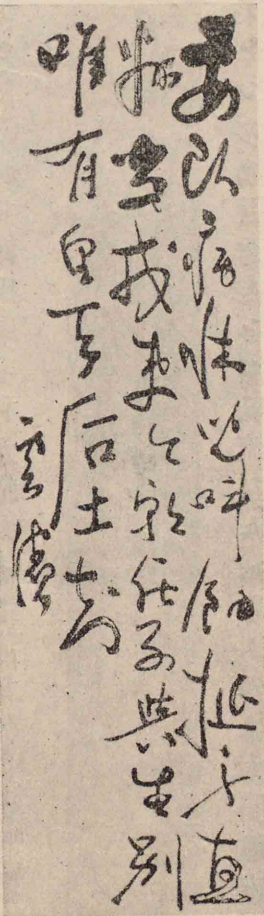


豐 臣 秀 吉 筆 蹟

が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をもものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を

集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足りない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にこつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

妻臥病牀兒
叫飢擬身直
欲當戎夷今
朝死別與生
別唯有皇天
后土知
雲濱



蹟筆演雲田梅

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒」叫飢。橋本景岳の「始知松柏後凋心」頼三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東

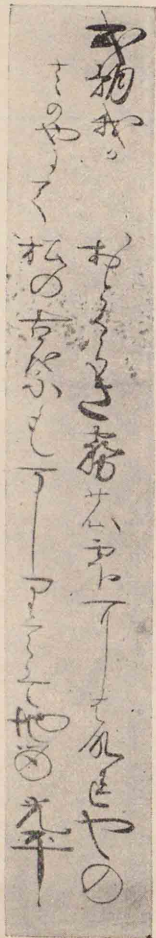
千秋萬古

或朝我かき
さのやにて
おとくらき
霧の雪には
なれやの松
の古葉もま
しりてそふ
る光平

披瀝す

秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。しかし日本では文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりすることはなかつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名



蹟筆平光林伴

を殘さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心掛けるがよい。否、平生から文學に心掛けるほどの襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

帝國新讀本 卷六 終

大正十三年十一月三日印
大正十三年十一月六日發
大正十四年二月十二日訂正再版印刷
大正十四年二月十四日訂正再版發行

(本 讀 新 國 帝)

定 價	
自卷一	各金四拾八錢
卷四	各金四拾參錢
卷五	各金四拾參錢
卷六	各金四拾貳錢
卷八	各金四拾貳錢
卷九	各金參拾七錢

大 正 十 三 年 五 月 十 日 定 價	
自卷一	各金八拾貳錢
卷四	各金七拾參錢
卷五	各金七拾參錢
卷六	各金七拾壹錢
卷八	各金七拾壹錢
卷九	各金六拾參錢

編 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 印 刷 者 東 京 市 神 田 區 通 神 保 町 九 番 地 合 資 會 社 富 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 東 京 市 小 石 川 區 音 羽 町 六 丁 目 富 山 房 印 刷 工 場



發 行 所

東 京 神 田 區 通 神 保 町 九 番 地

合 資 會 社 富 山 房

電 大 手 六 三 七 〇 七 〇 一 三 番 振 替 東 京 五 〇 一 番

庫

25

563

広島大学図書

2000301563

